

新得町

# 屈足17遺跡

－道営農業農村整備事業新屈足地区用地内埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成28年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

新得町

# 屈足17遺跡

－道営農業農村整備事業新屈足地区用地内埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成28年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター





空中写真 (写真左がトムラウシ方面)



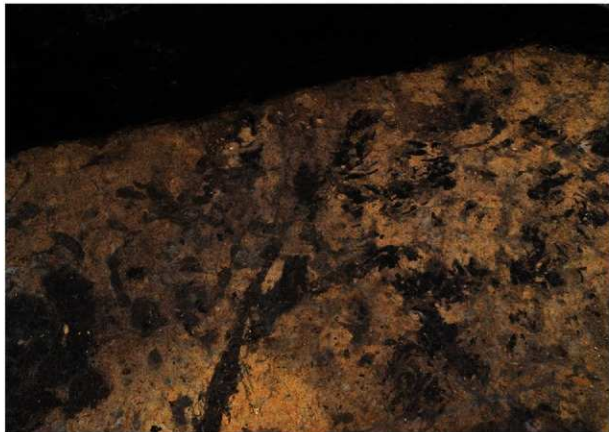
遺跡遠景 狩勝峠より見た屈足17遺跡と27号ガンケ (拡大)



遺跡遠景 狩勝峠より見た屈足17遺跡と27号ガンケ



石器ブロック1 調査状況



シカ足跡と湧水跡



土層断面 (I-J)



土層断面 (K-L)



土層断面 (O-P)



土層断面 (A-B)

## 例 言

- 1 本書は、平成28年度に当センターが調査を実施した新得町、農道整備特別対策事業新屈足地区用地内の埋蔵文化財包蔵地「屈足17遺跡」の発掘調査報告である。但し、整理報告作業は道営農業農村整備事業新屈足地区用地内埋蔵文化財発掘事業の予算で行った。
- 2 現地調査は富永勝也・福井淳一が行った。本書の執筆は富永、福井の2名が分担し、文責者は末尾に各弧で記した。全体の編集は富永が担当した。
- 3 各種分析・鑑定等は下記機関に依頼または、委託した。
  - ・放射性炭素年代（AMS測定） 株式会社 加速器分析研究所
  - ・黒曜石原産地同定 有限会社 バレオ・ラボ
- 4 石材の鑑定は、富永が担当した。
- 5 現場調査での写真は福井が撮影し、調査写真、遺物写真、写真図版の編集は富永が担当した。遺物写真は菊池が担当した。
- 6 遺物整理は、土器・石器・自然遺物を富永が担当した。
- 7 調査報告終了後の出土遺物および記録類については新得町教育委員会が保管する。
- 8 調査にあたっては、下記の諸機関・各氏からご指導ご協力をいただいた。（順不同、敬称略）

北海道教育委員会、北海道十勝総合振興局南部耕地出張所、新得町役場産業課：堀龍謙一、新得町教育委員会社会教育課：岡田徳彦、乙井逸人、帯広市：安達廣、安達隆幸、新得町：袴田幸男、電源開発株式会社東日本支店土幌電力所：大久保昭一、帯広市百年記念館：北沢実、帯広市埋蔵文化財センター：山原敏朗、平取町沙流川歴史館：森岡健治、幕別町立郷土博物館：大矢義明。



## 凡 例

1. 実測図、拓影図の縮尺は、原則として次のとおりである（変更する場合は各図中にスケールをつけてある）。

遺 構 1：40

復元土器 1：3 破片土器 1：3

剥片石器 1：2 磨製石器 1：3 礫石器 1：3、1：2（遺物に応じて使用する）

2. 掲載遺物の写真の縮尺は任意である。
3. 遺構の遺物出土位置図の記号は、必要に応じ図毎に凡例を添付した。
4. 土層の表記は、基本層序についてはローマ数字で、遺構覆土等の部分的な層位についてはアラビア数字で示した。土層の色調表現は『新版標準土色帳』（1998年版）に従った。土層注記は①層位名②土色③土性④粘り⑤堅密度（固さ）⑥その他の順で示している。

③土性区分

砂土：S 砂壤土：SL 壤土：L シルト質壤土：Sll 埴壤土：CL 埴土：C

④粘着性の区分

粘着性：なし、弱、中、強。

⑤堅密度の区分

触感による：すこぶるしょう、しょう、軟、堅、すこぶる堅、固結。

5. 図、表に関して章ごとに通し番号とした。 (富永)

# 目 次

## 口絵

- 1 空中写真
- 2 遺跡遠景
- 3 調査の様子等
- 4 土層

## 例言

### 凡例

### 目次

### 挿図目次

### 表目次

### 図版目次

## I 章 調査の概要

- 1 調査要項……………1
- 2 調査体制……………1
- 3 調査の経緯……………1
- 4 調査結果の概要……………2

## II 章 遺跡の位置と環境

- 1 遺跡の位置と環境……………5
- 2 新得町の歴史的環境……………17

## III 章 調査の方法

- 1 発掘区の設定……………27
- 2 発掘調査の方法……………27

- 3 整理の方法……………29
- 4 遺物の分類……………29
- 5 基本層序……………31

## IV 章 調査の結果

- 調査の結果……………35

## V 章 出土遺物

- 包含層の土器……………43  
包含層の石器……………43

## VI 自然科学的手法による分析結果

- 1 屈足17遺跡における  
放射性炭素年代（AMS測定）……………47
- 2 屈足17遺跡出土黒曜石製石器の  
産地推定……………51

## VII 章 総括

- 1 屈足17遺跡で想定される人類活動……………55
- 2 石器組成・動植物遺存体からみた  
縄文時代十勝地域の生業……………56
- 3 地域史……………60

## 引用・参考文献……………69

### 写真図版

### 報告書抄録

# 挿 図 目 次

## I 章 調査の概要

- 図 I - 1 遺跡の位置……………3
- 図 I - 2 屈足17遺跡の位置……………4
- 図 I - 3 周辺の地形……………4
- 図 I - 4 調査区設定図……………4

## II 章 遺跡の位置と環境

- 図 II - 1 十勝の地名図……………8
- 図 II - 2 十勝川流域の植生図……………8
- 図 II - 3 十勝川周辺の地形模式図……………12
- 図 II - 4 台地名称図……………13

- 図 II - 5 土壌分布図……………13
- 図 II - 6 表層地質図……………13
- 図 II - 7 美蔓台地について……………14
- 図 II - 8 周辺の地質……………15
- 図 II - 9 周辺の露頭……………16
- 図 II - 10 武四郎行路図1……………18
- 図 II - 11 武四郎行路図2……………19
- 図 II - 12 旧地名図……………20
- 図 II - 13 「手控」推定行路……………20
- 図 II - 14 「東西日誌」推定行路……………21
- 図 II - 15 「十勝日誌」推定行路……………21

図Ⅱ-16	新得町内の遺跡	26
<b>Ⅲ章 調査の方法</b>		
図Ⅲ-1	発掘調査の方法	28
図Ⅲ-2	土層柱状図	31
図Ⅲ-3	土層断面図	32
図Ⅲ-4	V層上面の地形と 土層断面実測位置図	34
<b>Ⅳ章 調査の結果</b>		
図Ⅳ-1	石器ブロック1	36
図Ⅳ-2	湧水跡	37
図Ⅳ-3	沢頭跡・湧水跡・シカ足跡(1)	38
図Ⅳ-4	沢頭跡・湧水跡・シカ足跡(2)	39
図Ⅳ-5	沢頭跡・湧水跡・シカ足跡(3)	40

<b>V章 出土遺物</b>		
図V-1	出土土器・石器	45
図V-2	出土石器	46
<b>Ⅵ章 自然科学的手法による分析結果</b> (個別記載)		
<b>Ⅶ章 総括</b>		
図Ⅶ-1	北筒式期の十勝地域の遺跡分布	56
図Ⅶ-2	新屈足入植図	61
図Ⅶ-3	地域図	61
図Ⅶ-4	袴田コレクション	61
図Ⅶ-5	袴田・安達コレクション	62
図Ⅶ-6	安達コレクション	63
図Ⅶ-7	早期テンネル・晩式出土遺跡分布	64

## 表 目 次

<b>Ⅱ章 遺跡の位置と環境</b>		
表Ⅱ-1	十勝各台地の地形面対比表	14
表Ⅱ-2	新得町内の遺跡一覧表	25
<b>Ⅲ章 調査の方法</b>		
表Ⅲ-1	土層注記一覧表	33
<b>Ⅳ章 調査の結果</b>		
表Ⅳ-1	フレイクチップ重量一覧表	41
表Ⅳ-2	遺物出土点数一覧表	42

<b>V章 出土遺物</b>		
表V-1	掲載遺物一覧表	44
<b>Ⅵ章 自然科学的手法による分析結果</b> (個別記載)		
<b>Ⅶ章 総括</b>		
表Ⅶ-1	北筒式期の石器組成	57
表Ⅶ-2	テンネル・晩式土器 出土遺跡一覧	64

## 写 真 図 版 目 次

1・2	遺跡遠景など	25~44	沢頭・湧水跡・シカ足跡など
3~7	遺跡周辺の景観など	45~55	調査区完掘状況・沢頭など
8~12	美葦台地の露頭現況など		出土土器・石器
13~15	遺跡全景など		袴田・安達コレクション
16~19	基本土層など		黒曜石原産地同定試料
20~24	屈足27号ガンケなど		

## I章 調査の概要

### 1. 調査要項

事業名：平成28年度

(工事) 農道整備特別対策事業新屈足地区用地内埋蔵文化財発掘調査事業

(整理・報告書作成) 道営農業農村整備事業新屈足地区用地内埋蔵文化財発掘調査事業

委託者：北海道十勝総合振興局産業振興部南部耕地出張所

受託者：公益財団法人北海道埋蔵文化財センター

遺跡名：屈足17遺跡(L-06-31)

所在地：上川郡新得町字屈足784-6ほか

調査面積：900㎡

調査期間：平成28年5月12日～7月7日

整理期間：平成28年11月1日～平成28年3月24日(整理・報告書作成)

### 2. 調査体制

平成28年度

理事長 越田 賢一郎

副理事長 中田 仁

専務理事 山田 寿雄

常務理事 長沼 孝(第1調査部長兼務)

総務部長 和田 基興

第2調査部長 三浦 正人

第2調査課長 鈴木 信

主査 菊池 慈人

主査 富水 勝也(調査・整理担当者)

主査 福井 淳一(調査担当者)

### 3. 調査の経緯

この調査の原因である農道整備特別対策事業新屈足地区工事は、北海道十勝総合振興局が実施している「新屈足地区農道特別対策事業新屈足地区新屈足幹線(1,000m)」計画の一環である。農道新屈足幹線は、新得町字屈足の町道屈足瓜幕線から分岐して北に延び、新屈足と西上幌内を結ぶ一般道道屈足鹿追593号線にいたる総距離5kmの一般農道である(図I-1・2)。

屈足17遺跡の調査範囲に関しては、農道の改修工事に伴って、延長約200mにわたる急カーブ路線の改良切替工事が計画され、平成27年に十勝総合振興局(当時)から北海道教育委員会(以下道教委)に埋蔵文化財保護のための事前協議書が提出された(図I-3)。

協議を受けた道教委は、平成27年5月12日に約9,600㎡の試掘調査を実施し、発掘を必要とする面積900㎡が示された。その後、工事計画が具体化するにあたり、最終的に通常の発掘調査範囲900㎡について、発掘調査が必要と判断された。当該地域における路線の変更は不可能なことから、当センターが平成28年に委託を受け発掘調査を実施することとなった(図I-4)。

調査は、平成28年5月12日から始まった。表層の牧草部分除去後、黒曜石の剥片などの遺物が検出されたことから、その面から発掘調査を行った。また、調査範囲内に1ヶ所電柱が存在しており、そこに隣

接して遺物が出土したことから、その部分についても移設前に電源開発株式会社から許可を得て、周囲を補強しながら発掘を行うこととなった。出土遺物整理作業と報告書作成は、道営農業農村整備事業新屈足地区用地内埋蔵文化財発掘調査事業に切り替えて、平成28年度内に行い調査報告書を刊行する。

#### 4. 調査結果の概要

屈足17遺跡は、十勝川河口から約98km上流に遡った上流域の左岸。標高310m程の河岸段丘の端部に立地し、市街地（新得地区）より北東方向9.5kmに位置する。遺跡より南西300mの地点に27号ガンケと呼ばれる大露頭がある。火砕流堆積物を覆うシルト、砂、砂礫層の露頭であり、美蔓台地が十勝川により長い年月をかけて浸食されて出来上がったものである。この露頭を含め、十勝川左岸沿岸部に面して続く10km程の火砕流堆積物（溶結凝灰岩）の断崖があり、アイヌの人々がカムイロキ（神の座・神様の座る処）と呼び信仰してきた事が幕末の探検家・松浦武四郎により記録されている（松浦1856）。

調査の結果からは、縄文時代早期から後期にかけての生活域であることが判明した。早期では沢の湧水源地を水場として利用した人や動物の痕跡があり、後期の頃には、そこに集う鹿等の狩猟場としての利用されたことが遺物の出土状況から推測する事が出来る。

また、石棺の加工の際に出たフレイクチップが約9.175g出土することから、石棺を製作、または補修していた場所であったことが解る。この時期の住居や貯蔵施設などの遺構は検出されていない。

発掘調査の結果、遺物総点数は43,126点、その内訳（表IV-2）は土器42点、石器43,084点である。土器は早期の土器片が10点、後期の土器片は21点、晩期の土器片が11点である。石器の内訳は黒曜石製の石鏃が4点、石槍は158点、つまみ付きナイフが1点、スクレイパーは8点、フレイクチップは42,876点である。礫石器は、石斧1点、たたき石1点、すり石1点、くぼみ石1点、台石3点等である。出土遺物の中で特徴的な物としては、早期の擦切り磨製石斧（ロジン岩製）が1点、同じく早期初頭のテンネル・晩式の土器片が数点出土している。

昭和初期までは久木田さんというアイヌの女性が一人、遺跡北側の沢頭（図版4-14・15、12-53・54）を水場として利用していたことが、入植当時の様子を知る袴田氏から聞くことが出来た（図II-9、図VII-4）。

久木田家については、鹿追町との境界付近にチセを建て住んでいたことが、「鹿追町史」に記録が残されている。同一人物と思われるので、ここに原文を示す。

「上幌内西区に居住した久木田作蔵について、父親とともに近所に入植した谷信一は、  
 「私がまだ少年の頃、久木田は土地十町歩を所有し、馬2頭を飼育して主人は作蔵といった。長男は作太郎、次男は次郎、女の子も2人いて妹の方はヨシ子と呼んでなかなかの美人であった。芽室の方へ嫁いでいったようだが若死にしたらしい。何でも上幌内に入地したのは大正4年頃と記憶しているが、よく芽室方面から同族の者が来て宿泊していた。狩猟者たちの宿泊所であったのかも知れない。  
 熊祭りも2度ほど記憶しているが、その都度芽室から同族の者が集まって来ていた。おばあちゃんは口にいれずみをしており、おじいさんは3人ほど妻をもっていたようだ。この人は芽室の「毛根系統」の者らしく、芽室方面の同族の出入りが多かった。死者もあったが、どこか遠くへ運んでいったようだ。住宅の東に下屋をつくり、ここに祭壇を設けて木を削った幣そくを立ててあったことも思い出すが、昭和8年頃転居していった」と語り、また、久木田の2女と同級生、西瓜暮の岡本保雄の妻の話によると2女は「サク」といい美しい気立てのよい子で、仲良く遊んだものだ、当時を憶んでいた。  
 この2女の名はサクとヨシとの違いが出てきたが、小学校時代の仲良く友達との記憶が正しいと思われる。久木田について役場の戸籍に見当たらないので芽室町に調査を依頼した結果「昭和のはじめ頃、鹿追から久木田作蔵というアイヌの人（明治31年生）芽室町に移住した形跡あり」と回答が得られた。」（鹿追町史概要より）

女性の息子達が芽室に移住したことは現地の聞き取りでも確認している。

（富永）

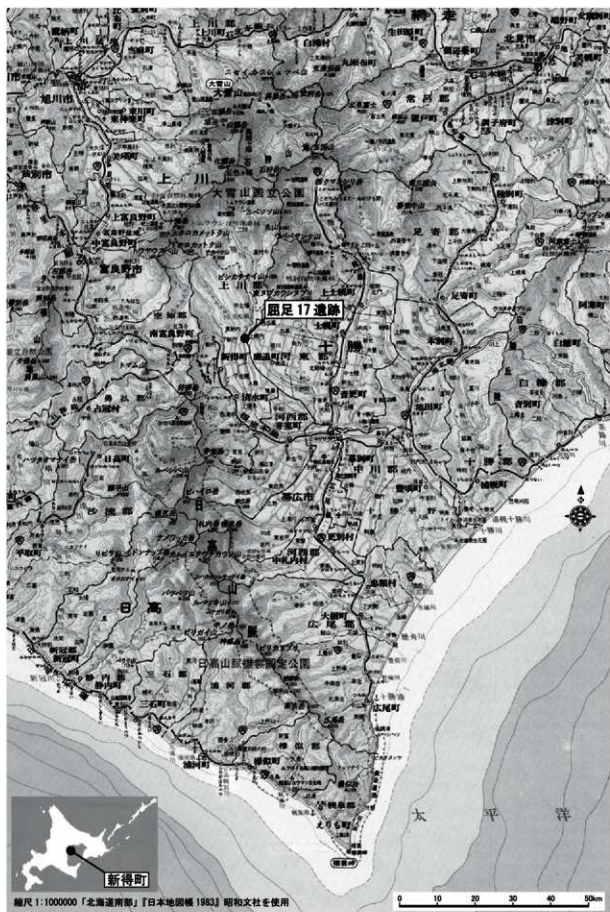


図 I - 1 遺跡の位置

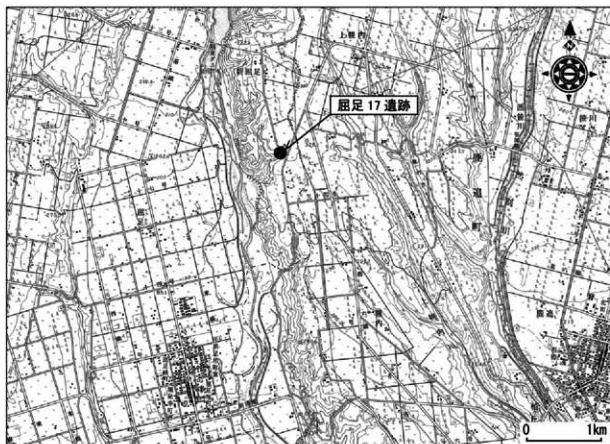


図 I-2 屈足17遺跡の位置 (国土地理院発行の1:50,000地形図「新得」を使用)

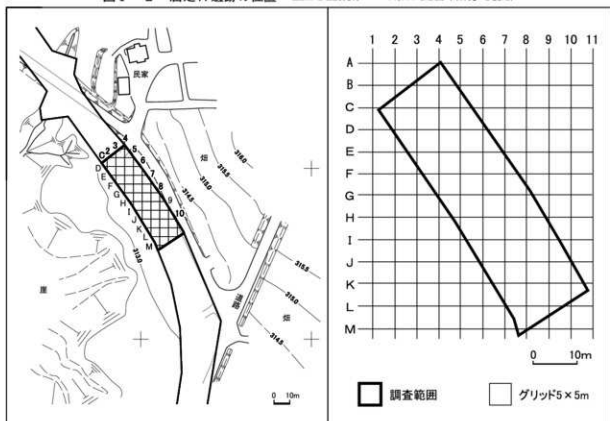


図 I-3 周辺の地形

図 I-4 調査区設定図

## II章 遺跡の位置と環境

### 1. 遺跡の位置と環境

#### (1) 新得町の概況

遺跡の所在する新得町は、北海道を縦断する日高山脈の東側、北海道十勝支庁の最西部（十勝平野の北西端）に位置する。町庁舎所在地は東経142度50分33秒・北緯43度4分39秒にあり、標高は178mである。明治40年に山脈を横断する「狩勝トンネル」が開通し、十勝・道東の玄関口となった。市街地の中心部にあるJR新得駅の標高は187m、新得駅から十勝中心の帯広駅までは43.8km、札幌駅までは176.4km、新千歳空港までは132.4kmの距離である。新得町内の市街地は、新得駅と本町庁舎を中心とした新得地区と、新得台地を挟んで約6km東に位置する屈足地区の2か所に分かれて位置している。現在の人口は6,361人（平成27年3月現在）。農業を主な産業とする町である。総人口は昭和50年以降減少しつつある。

新得町の主要な河川は、新得町十勝岳に源を持ち、屈足地区を抜けて十勝平野の中央部を流れる道内第3位の長さの大河川・十勝川と、水源を北東の佐幌岳北方のホロカメツク山と稚空知山（標高790m）間の分水嶺から、佐幌岳の麓を流れる1級河川・佐幌川（流路延長42.8km、流域面積379.6km<sup>2</sup>）が、新得地区を流れ清水町で十勝川に合流し注ぐ。主要な二つの河川が町域内を流れる。

市街地（新得地区）は町域の南部にあり佐幌川に面する、佐幌川には途中30あまりの支流が合流するが、代表的なものは上流から左岸側に一ノ沢、二ノ沢、三ノ沢（西サホロ川）、右岸側にパンケシントク川、9号川（パンケシントク川に合流）、パンケオタソイ川、パンケオタソイ川、イワシマクベツ川、金平川、ベケレベツ川、ナイ川（ベケレベツ川に合流）、小林川である。

行政区域の北西部は上川管内空知郡南富良野町に接し、南部で接している十勝管内上川郡清水町とともに交通網で結ばれ、行政、経済はもちろんのこと、住民にとっても切り離せない関わりがある。このほか、東部は河東郡鹿追町と接し、なかでも然別湖等の水源を利用して、北電上岩松発電所二号機を動かし、新屈足地域において飲用水の供給を受けるなど、生活経済面でのつながりが深い。そして、北部では上川管内空知郡上富良野町と同管内上川郡美瑛町に隣接し、大雪山火山群をはさみ上川郡上川町、東部は河東郡土幌町と接しているが、この四か町との境界には2,000m級のニベソツ山、トムラウシ山、十勝岳連峰のオプタテシケ山、美瑛岳、十勝岳、上ホロカメツク山等の深くけわしい山並によって隔てられているため、産業・経済等の直接的な深い結びつきはほほみられない（図Ⅱ-1 図版1・2）。

町名の由来はアイヌ語の「シットク・ナイ」から来たもので、山の肩、または端の意味だと考えられている。また、アイヌの人達がお酒を造るための漆器、宝物を入れる漆器を「シントコ」といい、この地でその漆器が作られたことから、地名になったという説（十勝地名解）も根強い（『新得町史90年』概要より）。他にも、「シットク（肘）」は川曲がりや山の突出部をいう。この場合は新得山の突出部を指したのではなかろうか（山田秀三「地名解」）等、アイヌ語の由来は諸説あるが、新得町市街地の地形的には山田の見解が適当と考えられる。

気候条件は、町内の年間平均気温は7.1℃（平成22年から26年までの平均気温）、最高気温は36.2℃（平成11年）、最低気温は-28.3℃（昭和53年）である。年間の積算日照時間は1,693時間/年（平成22年から26年までの平均）、年間平均気温がやや低く、日照時間も短いものとなっている。平均風速は1.7m/s、降水量は1,133mmである。十勝管内では、新得町のみ「特別豪雪地帯」の指定を受けている。



他の地域と比較すると、日照時間が短く降水量が多い傾向にある。

年間の日照時間は北海道でも長い方だが、作物の生育期間の6月から9月にかけては曇りが続くことがあるため日照時間は短く、秋季の10月から翌年4月にかけては晴天の日が多く長い。また、山麓部沿いの地域は内陸部より降水量が多い傾向にある。このような気象条件から山麓部では酪農・畜産が盛んで、農牧用地面積は全体6.1%、牛の飼育頭数は人口の約5倍にあたる33,800頭余りに上る。そして、明治9年札幌郊外の真駒内に「放牧場」として発足した畜産試験場が昭和22年に新得町へと移転し、総面積1,573haの面積を有している。平成12年には「北海道立畜産試験場」として、平成22年には「独立行政法人北海道立総合研究機構」が設立され「農業研究本部畜産試験場」と新しい体制になり。新得の地で酪農・畜産の研究が進められている。

また、南部は十勝川流域の屈足地域、佐幌川流域の新得地域、その中間台地の上佐幌地域の3地帯に分かれ、それぞれ農耕地帯となっている。北部の大雪山系や西南部の日高山脈の影響を受け、寒暖差の激しい内陸の気候の特徴を有しており、新得町の気候は「そば」づくりに大変適した気候であることから、品質の高い「そば」が栽培されている（作付面積は220ha（平成23年度）そばの生産量は年間316t、更に作付面積は250ha（平成26年）にまで成長している）。そして、十勝川周辺に広がる十勝平野では、小麦、甜菜（てんさい）、馬鈴薯、小豆、いんげん等の畑作、酪農・畜産を中心とした大規模な農業が営まれ、これらに加工する食料品製造業が盛んで、本町を含む十勝地方が国内有数の食料供給地となっている。

町域の総面積は約1,064km<sup>2</sup>で、南北62.29km、東西30.76kmの南北に細長い形状である。面積は東京都の約1/2を有しており、新得町の総面積の約89%が森林地帯となっている。そのうち北部一帯83,690haが国有林で、更にその2/3が大雪山国立公園に指定されている。このような環境から林業も盛んに行われており、2010年では林業経営体数は67経営体、林業家数は53戸であった。2009年の新得町素材（丸太）生産量は100,000m<sup>3</sup>で、十勝で生産された素材の約8%を新得町で生産した。間伐材を国内初の住宅用2×4材に加工する工場など木工場6社が新得町内にある。そのため、製材の出荷量は十勝でも有数な規模である。

更に、新得町内には十勝川上流より十勝ダム、岩松ダム、屈足ダム（図Ⅱ-9）の3つのダムがあり、豊富な水量を利用した発電が行われている。2015年開始の「くったり発電所」を加えた7つの水力発電所があり、総発電力は130,020kw、札幌・釧路方面にも送電している「電源の町」となっている。

## （2）自然環境・十勝川の特徴（図版12-55）

十勝川は、その源を大雪山系の十勝岳（標高2,077m）と東大雪に発し、石狩山地を構成するオプタテシケ山（標高2,052m）、トムラウシ山（標高2,141m）の山間渓谷からの多くの支川を合わせて、山間峡谷を流れて十勝平野に入り、平野の中央部を北西から南東に横断し、佐幌川、芽室川、美生川、然別川等の支川を合わせて帯広市に入り、音更川、札内川、利別川等を合わせ、豊頃町において太平洋に注ぐ、幹川流路延長156km、流域面積9,010km<sup>2</sup>（浦幌十勝川及びその支川流域を含んだ場合）の一級河川である。

十勝川流域面積のうち山林が約47%、畑地や牧草地等の農地が約27%、宅地等の市街地が約1%となっている（図Ⅱ-2）。十勝川流域は、帯広市をはじめとする1市14町2村からなり、その人口は約34万人である（平成17年国勢調査）。

十勝地方では、サケ、スケトウダラ、シシャモ、ツブ、タコ等の漁が盛んに行われている。特に、サケは食料だけではなく皮を靴として利用するなど、アイヌの人々や開拓移民の生活を支えた貴重な資源であった。現在、十勝川の下流部はシシャモの産卵場にもなっており、沿岸部ではシシャモ漁が盛んである。

原流域の自然環境は、大部分が昭和9年に大雪山国立公園に指定され、ハイマツ、エゾマツ、トドマツ林等の針葉樹林や、針広混交林が広がる森林である。トムラウシ付近は昭和55年に原生自然環境保全地域十勝川源流部に指定された。源流部ではエゾマツやトドマツを主とする亜寒帯針葉樹林が広がる。十勝川の上流域や支流札内川、音更川では発達したケショウヤナギの群落がみられる。

#### ・上流域の特性

札内川合流点付近までは、河床勾配が約1/200～1/600であり、河道は砂礫の複列砂州を形成している。十勝川上流部において確認されている動植物は以下のとおりである。

木本類は上流部の高水敷には、ドロノキやオノエヤナギ、ケショウヤナギなどが生息する。なかでもケショウヤナギは、氷河期の遺存種<sup>(\*)</sup>であり国内でもごく限られた地域にしか生育していない貴重な種が分布している。他にもトカチスグリなどがある。草本類はヒメドクサ、オオイトドリ、チトセバヤカモ、オオヨモギ、クサヨシ、ツルヨシ等である。

(\*) 遺存種：氷河期に分布していた種が現在も残って生息・生育している種

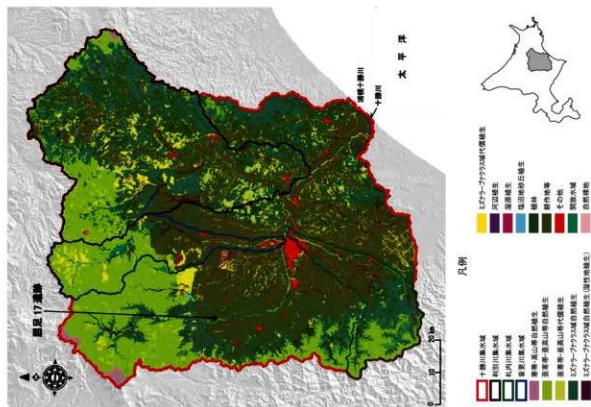
哺乳類ではエゾトガリネズミ、オオアシトガリネズミ、エゾヤチネズミ、エゾアカネズミ、エゾヒメネズミ、エゾリス、モモジロコウモリ、キタキツネなどが挙げられる。また、希少種としてはウスリドールベントンコウモリ、ヤマコウモリ、ヒメホリカワコウモリ、カラフトアカネズミ、エゾクロテン等の哺乳類が繁殖している。更に支流の佐幌川周辺では、エゾシカやタヌキ、エゾユキウサギが生息している。

鳥類は、上流部ではアオジやコアカゲラ、センダイムシクイなどの森林性鳥類が多く確認されており、草原性のオオジシギ、水辺にはチュウサギ等のほか、オオタカ等の猛禽類も確認されている。さらに、ホウロクシギやコチドリなどのシギ・チドリ類、セグロセキレイなどのセキレイ類といった水辺性の鳥類が生息している。河畔林には、アオジやコアカゲラ。砂礫の河原には、砂礫地を利用するアオサギ、ハクセキレイなどのセキレイ類、イカルチドリなどのチドリ類や、イソシギ等の鳥類が生息している。繁殖期には河川敷に生息するカッコウなどの草原性鳥類や、河岸部で集団営巣するショウドウツバメ等が確認され、他にも留鳥・夏鳥のチュウサギ、カワアイサ、オオジシギ、コアカゲラ、アオジ、ベニマシコ等多くの鳥類が確認される。越冬期や渡り期においても旅鳥・冬鳥ヒシクイ、タヒバリ、ベニヒワ等が飛来し、十勝川水系が鳥類にとって重要な生息地になっている。この他、佐幌川周辺ではオオアカゲラ、ヒヨドリ、アカハラ、ウグイス、ツグミもみられる。

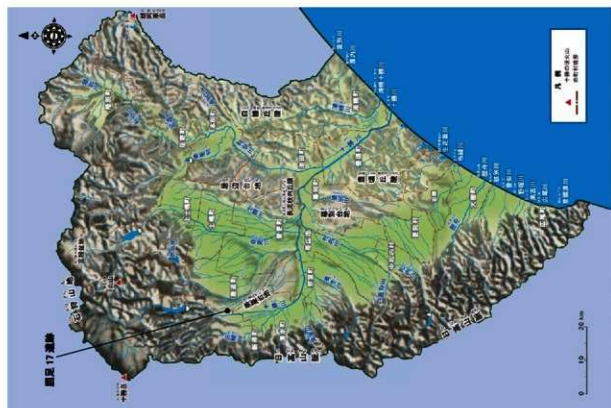
両生類ではエゾアカガエル、エゾサンショウウオが生息する。爬虫類ではシマヘビなどが確認されている。

魚類相は、淡水魚のスナヤツメ、エゾウグイ、フクドジョウ、ハナカジカ、ニジマス等が確認されている。国内最大の淡水魚であるイトウをはじめ、サクラマス等の魚類が生息している。ほかにも、回遊魚のウグイ、ギンザケ、イトヨ太平洋型も生息する（ギンザケは外来種である）。更に、支流である然別川の上流の然別湖には、道指定の天然記念物である「オシロコマ」が生息している。昭和の初めころまでは遺跡直下の十勝川でサケ魚が出来たと伝わる。支流の佐幌川では、フクドジョウやハナカジカの他、アメマスやニジマスが生息している（ニジマスは外来種である）。

十勝川は、源流部から河口にかけて、多様な環境が存在しているため、多種多様な昆虫類が生息している。具体的には、環境に応じてゴミムシなど河川敷に生息するもの、フタスジチョウなど河畔の樹木・森林等に生息するもの、カワラバツタなど草地に生息するもの、ルリイトトンボやエゾカオジロトンボなど沼や池などの止水域に生息するものなどが挙げられる。ほかにも、ミヤマアカネ、モンクサカゲロウ、セボシクサカゲロウ、ギンイチモンジセセリ、ヒメウラナミジャンノメ、キバネケシガムシ、ツヤクシケアリ等がみられる。



図Ⅱ-2 十勝川流域の植生図



図Ⅱ-1 十勝の地名図

底生動物はモノアラガイ、ヒメヒラタカゲロウ、フタマタマダラカゲロウ、ヤマトチビミドリカワゲラ、ヤマトアミメカワゲラモドキ、ウルマーシマトビケラ等が生息する。

### (3) 十勝・新得町周辺の地形と地質

十勝平野北部の地形は、山地（石狩山地・日高山脈）、丘陵・台地（美憂台地など）、河岸段丘（洪積地あるいは台地）、起伏の大きい丘陵、十勝川とその流域の低平地（沖積地）に区分される。なお、十勝では特に段丘地形が発達しているのが特徴である（図Ⅱ-1 口絵2 図版3）。

北東方面と南西隅に標高1,000m級の山地が分布している。これらは中世代（ジュラ紀<sup>(\*)2</sup>）～白亜紀前期<sup>(\*)3</sup>）に属する日高累層群および花崗岩により構成されるビシカチナイ山（鹿追町北瓜幕）と佐幌岳を中心とする。これらの中間に、南に緩く傾き開析された台地が広がる。約100万年前に十勝北部を埋め尽くした「十勝三股火砕流」のあと、浅い海と湿地の時代を経て、少しずつ隆起して高台が形成された。更に、十勝川の働きにより形成された扇状地性の台地である。

(\*)2) ジュラ紀：現在から約1億9960万年前から、約1億4550万年前を指す。中生代の中心時代。

(\*)3) 白亜紀：約1億4500万年前から6600万年前を指す。中生代の終わり。

#### ・美憂台地（図Ⅱ-1・3・4）

美憂台地とは、十勝川と然別川に挟まれた台地であり、石狩山地南麓岩松ダム付近を扇頂とし、音更町国見山にかけて約35km続く。瓜幕台地の西から南側を取り囲むように、北から南、西南西から東南東へ次第に方向を転じながらへちま形をなして分布している。本台地上の水系については、台地全体の曲がり方向にやや斜交または平行に、台地の傾斜方向に「必従的」に流れ然別川に合流する。

#### ・土質（図Ⅱ-5 口絵4 図版5）

支笏カルデラ周辺、東大雪、雌阿寒岳等の火山から噴出した火山灰が十勝一円に降り積もり、厚い火山灰層を形成した。堆積している火山灰は新旧合わせて20種類以上に及び、古くは10万年前のものが見られる。

十勝には、褐色と黒色の2種類の黒ボク土が混在し、「乾性」「湿性」の火山灰と呼び慣わされてきた。土壌分類上は、それぞれ「淡色黒ボク土」、「腐植質黒ボク土」とされ、特に排水不良な条件では「多湿黒ボク土」となる。新屈足周辺は黒ボク土と多湿黒ボク土からなり、遺跡内は厚い所では50cm程の層厚で黒ボク土が発達していた。

十勝東北部の台地・丘陵地では、堅くてやや重粘な褐色森林土や灰色台地土がみられる。低地では、川が運んできた粘土や砂を母材にした土壌が堆積し、排水の善し悪しで褐色低地土、灰色低地土、グレイ土に区分される。土層中に石礫の多いことも十勝の特徴である。十勝川下流域の低湿地帯では、繁茂したヨシやハンノキなどが分解せず堆積し、泥炭層を形成している。

#### ・表層地質（図Ⅱ-6・8）

図Ⅱ-6では、十勝川流域の表層地質は、十勝川、音更川、利別川上流域等の流域北部では、安山岩、軽石流堆積物や火山砕屑物等の火山性岩石が広がり、十勝川中・下流域では、ローム、砂礫等で構成される地質時代の第四紀層<sup>(\*)4</sup>や沖積層<sup>(\*)5</sup>が広がっている。なお、十勝川下流域では、数メートルの厚さで泥炭層が分布している。また、日高山脈に沿った札内川上流域では、日高累層群の粘板岩、花崗岩やはんれい岩等の深成岩類、ホルンフェルス等の変成岩類が分布している。

(\*)4) 第四紀層：第四紀（人類時代または氷河時代）の更新世200万～1万年前に形成された層。

(\*)5) 沖積層：第四紀の完新世（1万年～現在）に形成された層、水辺の堆積物、特に河川沿いの堆積物よりなる地層の意味。

遺跡のある新屈足周辺は、地質時代の新第三紀以降堆積した層からなり、屈足市街地のある低位部は完新世に形成されたものである。

#### ・美蔓面 (図Ⅱ-7)

十勝平野は、中生代(地質時代:ジュラ期~白亜紀前期)以降100万年ほど前までは海域であったが、80万年ほど前に長流枝内丘陵(居辺台地)や幕別台地が形成されていく一方で、音更町を中心に盆地が形成され広大な潟湖や湿原となった。

70万年ほど前の日高山脈の急激な上昇により現在の平野の原形である扇状地が形成された。十勝北部にたまった「美蔓礫層」も扇状地堆積物として広がっている。

その後、河川が侵食を繰り返して、次々と階段状の地形を刻んで、現在見られる幾段もの段丘地形が形成されるとともに、川の上流部、日高山脈と石狩山地が上昇し、礫層は川によって削られ、崖を作った。この崖の上に広がる平地を「段丘(河岸段丘)」と呼ぶ。川に削られずに残された扇状地を「扇状地面」と呼ぶ。古期扇状地礫層で構成され、面堆積物として「白粘土」をのせる最高位の地形面を北部では「美蔓面」、南部では「光地面」と呼ぶ。

#### ・段丘 (図Ⅱ-7・8)

第Ⅰ段丘面とは、瓜幕台地と美蔓台地を主に構成する面であり、音更川下流東岸側に狭長な分布が認められる。その高度は、瓜幕台地においては、東瓜幕付近で海拔300m前後に達しているが、南東方向に次第に高度を減じ十勝種畜牧場一帯で160~190mとなる。一方、美蔓台地では、岩松ダム付近で海拔400m前後に達するが、南~南東方向に次第に高度を減じ国見山付近では120m前後となっている。いずれの台地においても開析が進んでいるが、その程度は南東の末端部で大きくなり、現河床との比高は50~60mに達している。

新得町西部では、美蔓台地と同じ第Ⅰ段丘(東新内面)と、第Ⅱ段丘(上佐幌面)、第Ⅲ段丘(下佐幌面)、第Ⅳ段丘(屈足面)、第Ⅴ段丘(十勝川縁)に区分けされる。屈足市街地や屈足11・12遺跡は第Ⅳ段丘面の屈足面に属する。これらの河岸段丘は、高位段丘として第Ⅰ段丘面、中位段丘として第Ⅱ・第Ⅲ段丘面、低位段丘として第Ⅳ・Ⅴ段丘面として大別される。

東新内面は東新内の平坦面および十勝川に沿う段丘面を呼称したもので、標高320~360mにわたって発達し、現河床からの比高80~100mを示す。「新得図幅」では美蔓面に含まれている。

上佐幌面は、東新内面より比高20~40mの緩斜面で分けられる段丘面で、部分的に厚い砂礫層で被覆されている。

下佐幌面は、上佐幌面と比高40mの緩斜面の境界で分離される広い段丘面であり現河床より25m程度の高さを示している。

屈足面は、もっとも低位の段丘面として十勝川沿いに発達し、河床より5~10mの高さを示す。

新得町では第Ⅰ~Ⅲ段丘面の水系は佐幌川に合流し、第Ⅳ~Ⅴ段丘面の水系は十勝川に注ぐ。第Ⅳ段丘での現河床との比高差は約10mである。

屈足面を構成する礫層は、屈足溶結凝灰岩層の削剥面にのり、この礫層の上位には、下位より赤褐色ローム、Spfa-1、En-aを挟む褐色ローム層が分布するとされるが、これらの火山灰の分布は屈足市街地付近が北限とされる。

・美蔓台地の基盤層について (図Ⅱ-7・8:昭和45年「佐幌岳」5万分の1図幅説明書 北海道立地下資源研究所より引用作成)

屈足層とは、美蔓台地の基盤を構成する主に溶結凝灰岩と凝灰岩により成る堆積物の層である。屈足層の標識地、十勝川大露頭屈足26号露頭(図Ⅱ-1・9 図版6)を中心に、「新得図幅」内の屈

足利別道路切り割り、屈足32号対岸の沢、屈足34号対岸の沢、屈足27号対岸の沢（図Ⅱ-9）の観察から図Ⅱ-7が作成された（橋本1971）。

屈足層の最下部は砂礫層からなり、岩内のボーリング調査で存在が確認されている。その砂礫層を整合的に覆う溶結凝灰岩部層が発達する。溶結凝灰岩部層は下部より部層1、2および3に分けられる。

#### (K：屈足層)

部層1：溶結凝灰岩部層（流下軽石質凝灰岩層）は、灰白色の凝灰岩層で、絹糸光沢をもつ径20～100cmの軽石塊を多量に含んでいる。熔結の度合いは本部層のなかではもっとも強い。主体は流紋岩ないしは石英安山岩質溶結凝灰岩である。

部層2：淡い桃色を呈する細粒の軽石、火山灰の均質な層で、1～数cmの細角礫状の粘板岩、安山岩の破片が含まれる。屈足32号対岸の沢では約10mの比較的緻密に熔結した部分が部層の上部をしめて認められる。26号の露頭ではこの熔結部は認められず、屈足-上別道路では軟質になり、微弱な層理や軽石層も発達する。すなわち下流部に向かい熔結性を失う傾向がある。

部層3：サーモンピンクの色調の均質な火山灰層である。細粒の岩片は含まれる。32号対岸の沢では層厚は約30m、26号露頭では層厚約20mに減るが、その上部には浮石、礫を混じえる火山砂、粘土層より成る約10mの層が発達する。別道路切り割りについては火山灰から成る部分は失われ、層厚約20mの火山砂、同質粘土層が礫、軽石を伴って分布している。これは部層3の同時異相的堆積物と考えられている。

#### (TW：十勝溶結凝灰岩層)

十勝溶結凝灰岩は流走面を形成し起伏を埋めて広く分布する流紋岩質溶結凝灰岩であり、少なくとも2枚以上の冷却単位から成り立つ。パンケニコロ川上流では、パンケニコロ溶結凝灰岩を覆い全層厚150mに及ぶ発達を示している。この溶結凝灰岩の分布南限は、美蔓台地の屈足32号対岸の沢に達している。この溶結凝灰岩は屈足層上の不規則な侵蝕面に堆積した岩松層をさらに削りこんだ凹所を埋めており、「いわゆる帯広層」により不整合的に覆われている。

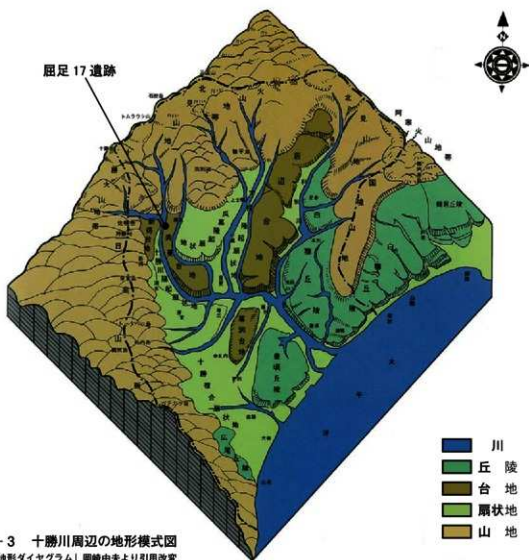
#### (OB：いわゆる帯広層<sup>(\*)</sup>)

西上幌内の台地表面上には十勝溶結凝灰岩を覆い、厚い砂礫層が堆積しており、この砂礫層はオソウシ川に沿って発達する標高420～440mの河段丘に連なっている。この砂礫層は図Ⅱ-7に示したように十勝溶結凝灰岩を不整合に覆うものである。

(\*)『新得図幅』では、この砂礫層の上部を構成する一部は西上幌内台地面、すなわち美蔓面堆積物とされ、下部のものは熊牛層に含まれている。しかし、『佐幌図幅』ではこの砂礫層を一括して以前に呼ばれていたように標式地の不明確な現況のまま、「いわゆる帯広層」として取り扱っている。

#### (補足) VI章-2、黒曜石の原産地推定について

試料No15（図版15-15）について原産地は不明のという結果になったが、遺跡のある美蔓台地の露頭（図版6）からは美蔓黒曜石が採取されることが知られ、地元産出の美蔓黒曜石も使用されていたと推測される。



図Ⅱ-3 十勝川周辺の地形模式図  
「十勝の地形ダイアグラム」岡崎由夫より引用改定

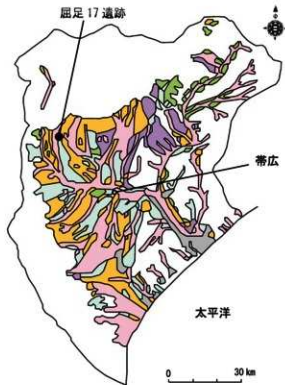


屈足17遺跡と屈足27号ガンケ



図II-4 台地名称図

十勝国研 1978より引用改変



図II-5 土壌分布図

「十勝の土壌」北海道十勝総合振興局より引用改変



図II-6 表層地質図

「十勝管内における」土壌の分類・特徴及び改良法」昭和50年北海道十勝支庁より引用改変

上図凡例

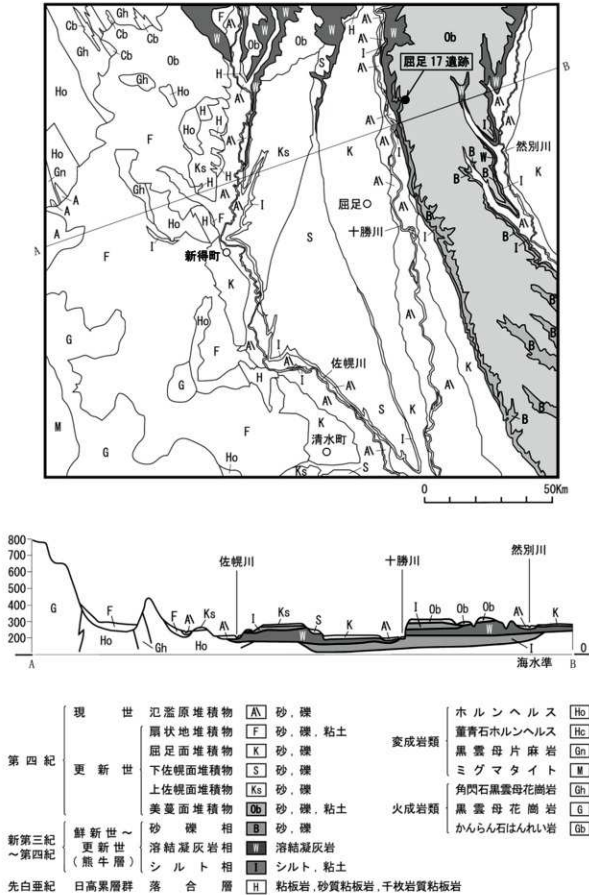
- 褐色森林土
- 黒ボク土
- 多湿黒ボク土
- 灰色台地土
- グライ台地土
- 褐色低地土
- 灰色低地土
- グライ低地土
- 泥炭土

横図凡例

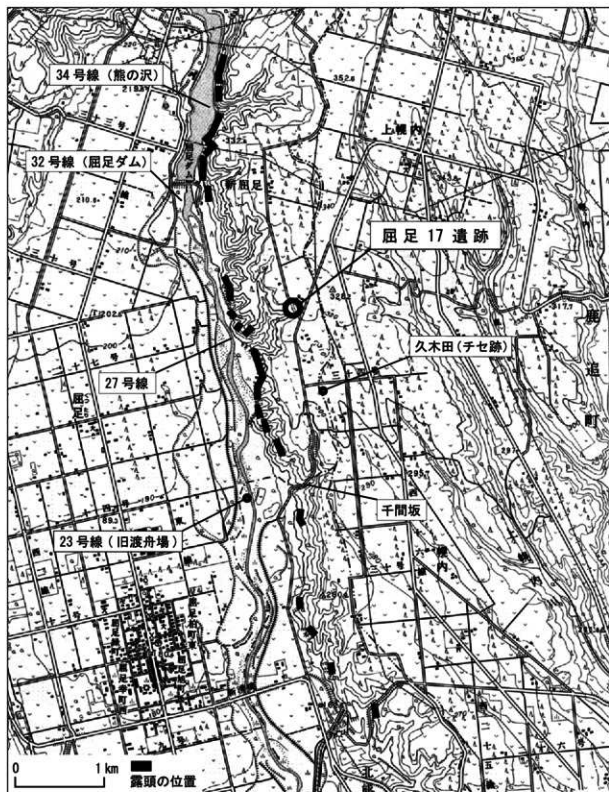
- 変成岩
- はんれい岩
- 花崗岩
- 安山岩
- 溶結凝灰岩
- ジュラ紀層
- 新第三紀層
- 白亜紀層
- 古第三紀層
- 更新世堆積層：氷河期
- 完新世堆積層







図Ⅱ-8 周辺の地質



図Ⅱ-9 周辺の露頭 (白色部分)

## 2. 新得町の歴史的環境

### (1) 新得町の歴史

新得町の開拓は明治32(1899)年、山形団体13戸の新得原野への集団入地が最初とされる。明治32年から明治35(1902)年にかけては、山形県人、福井県人、鹿児島県人が入地した。その後大正4(1915)年には人舞はか1カ村から分村し「屈足村」と称して北海道2級町村制を施行するようになる。大正12(1923)年1級町村制が施行され新得村、昭和8年(1933)年には「新得町」となった。その後終戦を迎えるまでに、簡易教育所や郵便局、発電所、警察分署、銀行支店等が設置された。

新得町は北海道の重心に位置する事から石狩・日高・富良野と十勝地方を結ぶ要所であり、狩勝峠(口絵2)は空知・上川地域を結び、十勝川は釧路・厚岸・国後を結ぶ重要な交通路だった。

江戸時代後期には、松浦武四郎をはじめとして数回の蝦夷地内陸探検が行われた。明治時代になると十勝川河口の大津より内陸への移住が始まる。北海道の開拓が官主導で進められる中、十勝川流域では民間の開拓移民によって開拓が進められ、明治16(1883)年に依田勉三を中心とする「晚成社(ばんせいしゃ)」が帯広へ入植した頃から本格的開拓が始まった。当時の主な交通手段は、十勝川等を利用した舟運であり、集落も船着き場を中心に築えてきた。

屈足周辺では、十勝川渡船場跡が新得町字屈足東2線25番地3付近(図Ⅱ-9 口絵1 図版12-55)にあった。屈足村から十勝川を渡りクテクウシ(鹿追)方面への交通の便が無い場合、交通路として、森利三郎が大正3(1914)年に屈足23号先から新屈足千坂間に通じる渡船場を開設したもので、人はもちろん荷馬車をも運んだ。そして道路開削に結び付属渡船場となったが、昭和3(1928)年拓殖鉄道の開通や、新清橋の架橋もあり15年間で役割を終えた。

工業等も徐々に発展し、建物や紙等の材料、燃料としての木材需要の高まりにより、川は原木流送の場としても利用されるなど、人々の生活に欠かせない大動脈としての役割を担っていた。一方、大雨が降ると十勝川やその支川等において幾度となく洪水は氾濫を引き起こし人々の生活を脅かすため、移住してきた人々にとっては、洪水との戦いでもあった。

その後釧路線(現JR根室本線)や、大津街道・石狩街道(現国道38号)等が相次いで開通し、昭和7(1932)年に、狩勝峠越えの旧国道が開通したことにより、舟運は減少していった。これらの交通網整備や治水事業、農地開発等により、徐々に農地や市街地としての利用が進んだ。

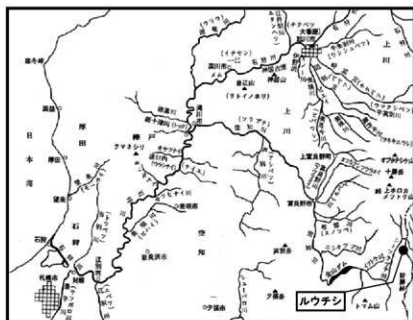
### (2) 幕末の交通(松浦武四郎の第六回蝦夷地調査…峠越え十勝入りについて)

函館奉行から東西蝦夷地山川地理取調の命を受け、幕府御雇となった幕末の探検家・松浦武四郎(当時40~41歳)は、1858(安政5)年(戊午)六度目の蝦夷地入りをする。

その時、武四郎が幕府に提出した「戊午東西蝦夷地山川取調日誌」によると、石狩にて探検準備を済ませ、2月21日石狩を出た武四郎の一行は、石狩川を漕上して上川へ、3月2日チクベツ(旭川忠別)番屋に到着し、石狩川の川上にあるウエンベツ(宇園別)まで一見し、上川アイヌを見回る。旭川では十勝へ越える仕度を整え、案内人と人夫は道筋を知っている者と入れ替えている。ここで武四郎は、十勝へ逃亡した盗賊がいると聞かされる。イソテク家とシリコツ子家から太刀や鐔(つば)など19品を無断で持ち去ったので、兩人から「この度彼の地へ行き候は、何卒して其者を捕らへ、品物など取り返しくれ候様」と頼まれ同行する事を許可している。

3月9日、チクベツ(旭川忠別)を武四郎、石狩詰下役・飯田豊之助と、案内のアイヌ人・クウチンコロ、アイランケ、シリコツ子、ニボンテ、セツカウシ、イワンバカル、タヨトイ、アエコヤン、サダクロウ、イヤラクル、サケコヤンケ、イソテクが加わった14人で出立した。

3月13日(新暦の4月26日)、道案内のアイヌ人達と残雪ある険しい谷間を登り、十勝境と思われ



松浦武四郎著 1860『十勝日誌』丸山道子訳 1975『十勝日誌』『空知地方図』より



松浦武四郎著 1858『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』  
「カムイロキの図」より 1985秋葉実剛訳

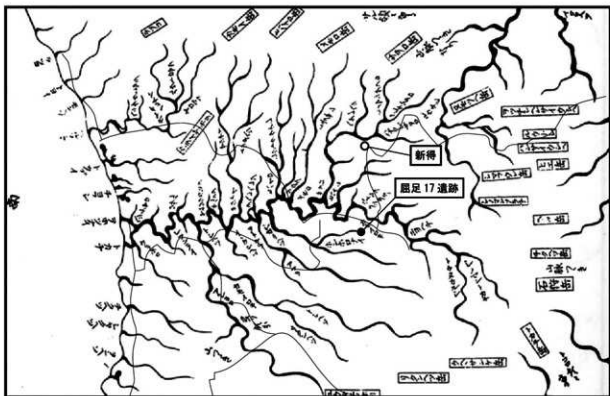


松浦武四郎著 1858『午手控』  
2007秋葉実剛訳『ヒハウン博覧』より



松浦武四郎著 1860『東西蝦夷山川地理取調記行 十勝日誌』  
1975丸山道子訳『十勝日誌』『十勝地方図』より

図Ⅱ-10 武四郎行路図①



松浦武四郎著 1860『戊午十勝日記』挿図「十勝川流域の地名」

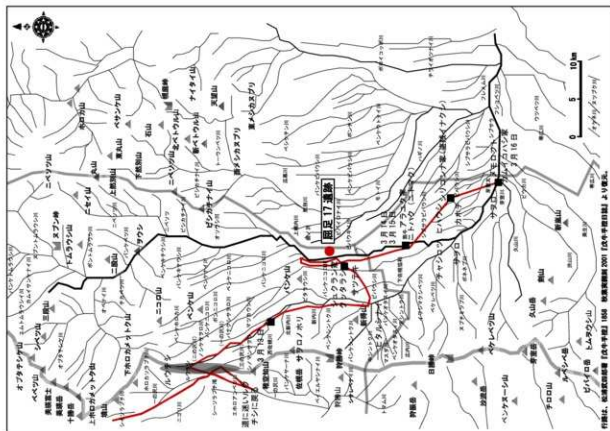


一瀬朝春筆 1872『白高十勝石神三州樺木建設ばっ歩圖』  
2000『新得町百年史より』

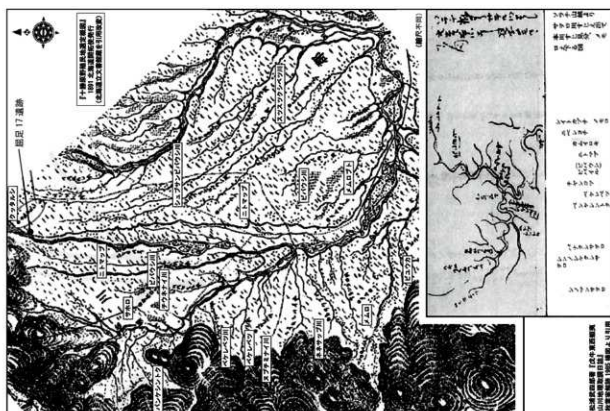


松浦武四郎著 1860『戊午十勝日記』挿図  
「十勝川上流の景色」

図 II - 11 武四郎行路図 2



図Ⅰ-13 「手控」推定行路



図Ⅰ-12 旧地名図

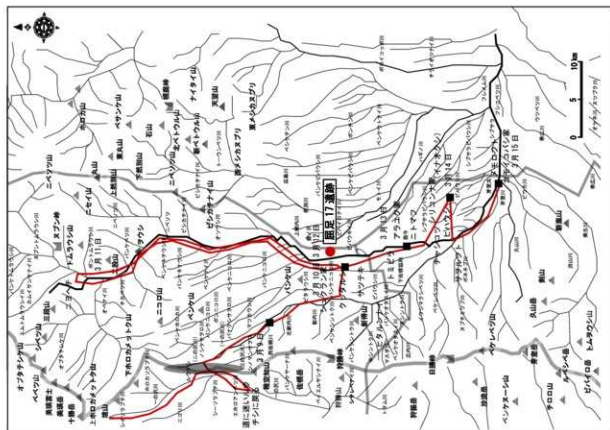


図 I-15 「十勝日記」推定行路

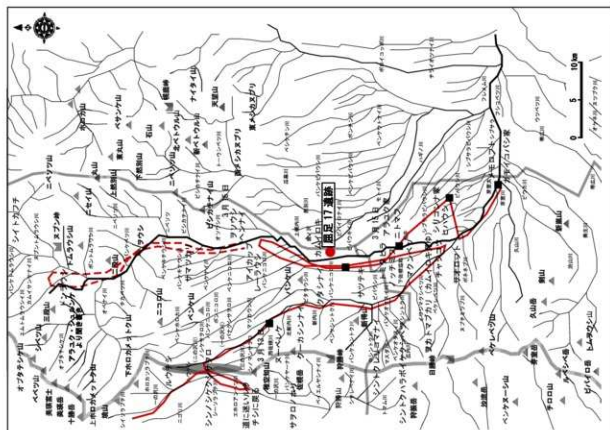


図 I-14 「東西日記」推定行路



る峠(ルウチシ)から、磁針を確かめず沢間に下りるが、そこは富良野側シソラブナ川下流であることが判明し、引き返して峠を越え、佐幌川上流のバナクシサロ川(一ノ沢)から佐幌川本流へ下ることができた(『十勝日誌』では3月9日に峠越えをしたと日付が変更されている)。この峠(ルウチシ)は、現在の狩野峠の北、下ホロカメツク山(標高1668m)から稚(しい)空知山(標高942m)間にかけてと考えられる(図Ⅱ-10)。

バナクシサロ川が合流する新内付近の佐幌川は、川幅が七、八間(1間約180cm)、川底が平板の一枚岩で急流、左岸に行くにも切り立っていて進むことができず、やむなく佐幌川を右岸に渡り、大笹原を三、四丁(一丁約109m)分け入り、トドマツの多いこの地に野営している。この宿営地は新得町字新内西6線185番地(一ノ沢)周辺と比定されている。

これより以前、3月9日にシリコツネとタヨイがソラチの山に狩りに行きたいと申告して離れる事になっている。この突然の申し出は、盗賊イナヲクシの件で幕府役人・飯田豊之助が同行している事を警戒して先に二人が先行し、武四郎を案内するアイヌ達はわざと道を間違え時を稼いだのではないかと憶測することができる。十勝地域の乙人ニトマフのアラク、ピハウシのシリコンナと云った二人が武四郎一行の到来を事前に察知していることも傍証になるだろう(図Ⅱ-12)。

その他にも、『上富良野百年史』(上富良野町1998)によると峠越えの際にアイヌの人達が利用する「夏の道と冬の道」の季節限定のルート問題があったことを推察されている。夏は熊笹が多く通れないが、冬は雪の上を最短ルートで踏破するという使い分けである。参考に明治期の狩野峠越えルートを示す(図Ⅱ-11)。松浦武四郎が残した峠越えから新得町周辺に至る記録は、以下の3通りの文書となっている。

- ①安政五年手控 午第一番 1858年(図Ⅱ-13)
- ②東西蝦夷山川地理取調日誌(戊午)東西日誌 1858年(図Ⅱ-14)
- ③東西蝦夷山川地理取調紀行(午戌)十勝日誌 松浦武四郎 文久元年1861年(図Ⅱ-15)

①は武四郎が旅の途中の野帳に記した記録。②は幕府に取調日誌として提出した記録。③は大衆向けに加筆出版したものである。ここでは、「手控」、「東西日誌」、「十勝日誌」の行程を抽出して佐幌の峠(ルウチシ)からピハウシ間を比較する。また、三冊でニトマフ・ピハウシの表記はゆれるが、それぞれ原文のまま示す。

#### ①午「手控(手帳)」(新得台地越えコース、14~15日ピハウシ到着)

3月14日 出立、大笹原凡そ五、六丁(最大654m)下り小川。小川越え。本川(佐幌川)。北岸を越え、少し山を登る。五丁計(545m)にて平野へ下り、かや野凡そ一里(4km)、小川。又十七、八丁(1962m)にてヒタルシナイ(小川)。坂を上りて凡そ一里(4km)。小川。しばし行きて小川(この川ピハウシの源か)。かや原凡そ一里。サツテキ(小川)水源来る。小川の中七、八尺(1尺約30cm、24m)。越えて平野。凡そ十丁(1090m)計。本川(十勝川筋)に出る。向かいの方カムイロキと言える大平(大崖)。しばしかや原下りて、クツラシ。人家・シユ克蘭家に寄る(イソテク2名、シリコンナの下へ派遣)。ニトハク入口七、八丁に待ち人(道案内)。分れ道。ニトマフのアラク家に泊る。15日朝出立。かや野を一丁下りてカホチ。越えて野へ上り凡そ二十丁(2180m)計にて人家・ノタカセ家。又野へ上り二十丁余にてピハウシ。下りて谷地を七、八丁人家・シリコンナ家。盗賊・イナヲクシに会う。

#### ②戊午「東西日誌」(佐幌川南下コース、16日ピハウシ到着) \*聞き取りに寄る行程あり

3月14日 曇りの為、急いで出発。五、六丁下りて川。北岸より渡る。ヌーベレケ。少し下りて南岸に小川。クーカシナイ。下ってクタシナイ(クツラシナイ)。東岸を登りて無名の小川三、四本。クタルシナイを下りて、南岸に小川。バンケニウシナイ。バンケニウシナイ。ニンニウシナイ。クタ

ルシナイより原道一里。シントクレリコマナイ。少し下りて、バンケシントク。バンケシントク。シントクハラボイケクシベツ。南岸に並び足り。

シントクレリケコマベツを出て、一丁(109m)。バラボケタシベツの下にて小川、バンケオタシユナイ。バンケオタシユナイ。

[本川筋しばし下る。ヨウコウシ。かや野を下ること凡そ一里、小川有。ヒバウシ。是ニトマフ下の本川へ落る川筋也。北岸ニセイケシヨマベツ。南岸イワオシマクシベツ。シシユエナエ。小川ナエイ。ホンラウネナイ。ホロラウネナイ。下にベケレベ(川幅三間計)。小川ヲカトマブカリ。川端にカムイロキ見ゆ。チャシコツ。しばし過ぎ、北岸ヲカトマブカリ(小川)。南岸エヲロシバケクシベツ。岸少し下りて、エンコロマナイ。南岸にノッチミフ(小川)。是より十丁計にてサヲロフト(佐幌川・川幅二十間)へ出ると聞く。]<sup>(\*)</sup>サツテキ(小川)。此川はサヲロへ落ずして本川へ落ると。五、六丁(654m)過ぎて本川；十勝川(川幅五十間)。カムイロキはこの川の東岸。右ニトマフ、サヲロフト。

[西崖の上に行く。凡そ二十丁行て、バンケニヨロフ(川幅二、三間)。三、四丁(436m)を過ぎてバンケニヨロフ。十丁上りて小川。レーラウシ。五、六丁上りてアイカッパ。少し上りて西岸に小川。ヘンナイ。五、六丁上りてヲソウシ。]<sup>(\*)</sup>

カムイロキ。下る事凡そ十丁計にして川端へ下る道有。三丁計下り崖の下に人家一軒・シュクラン家。三、四丁下るシュマーハラコシ。サツテキテ落ち来たり合流する。原を十丁下りクッタラシ人家・トノトク家。トミタビラ、西岸大平(大崖)也。人家有・キシロマ家。マクンベツ小川(枝川)。崖の下本川(十勝川)。人家有り・アリケウトム家。しばし下りアシリヒラ(近年崩れて出来る)。カブチャヤ川(本川とシカリベツの間)。五丁計を過てニトマフ。アラユク家。

15日 シルンケアイノ・エヲロサンと共に上川(十勝川上流)を見物。一日眺望する。

16日 出立。二十丁計下る。三丁計下に人家有り・ノタカシ家。マクンベツ対岸に人家・エチヤナクタル家、テムコロール家。二、三丁過てビバウシ。人家・シリコンナ家。盗賊・イナヲクシに会う。

(※6) 秋葉実氏によると、幕府に提出した②「戊午東西日誌」は、幕府への報告の為、川筋と地名を順序良く記す加工が加えられに、アイヌ人からの「聞き書き」に寄って行路を記し、新得から佐幌川河口への道筋は、実際は通っていない(『午手控一』P.61)。

③紀行 午戊「十勝日誌」(新得町市街地周辺から新得台地越えコース、14日ヒバウシ到着)

3月10日 穏やかな朝。南岸を七、八丁(872m)下る。北岸に平原、一里半(6km)あまり下り、ヒタルシナイ(小川)。一里過ぎてビバウシ(下佐幌平和・小川)。三十丁(3270m)サツテキ(小川)。一里半(6km)あまり。谷地十丁あまり。十勝川本流、川幅三十間あまり。カムイロキ。本流を半里(2km)下りチャシコツ。五、六丁過て人家・シュクラン家。イナヲクシがビバウシに居る事が判る。[3月11日 シュクランの案内で十勝川本流の川西(西岸)を登る。茅原二十余丁、バンケニヨロフ(小川)。三、四丁バンケニヨロフ(小川)。半里あまりレーラウシ(小川)、アイカッパ(大岩)、過て、二十丁、ペンナイ(小川)十町。ヲソウシ(向岸小川。以下略-)]<sup>(\*)</sup>

(※7) このシュクラン家滞在中に十勝川上流を踏査したことは武四郎の②「東西日誌」にはなく、丸山道子氏は実際に要した日数からフィクションと考えている(『十勝日誌』より)。

13日(シュクラン家から)草原を下流に下る(二十四丁余り)。シュマーハラコシ(小川)過て十七、八丁。サツテキ(小川)合流。三、四丁人家・トノトク家(周辺で土器石器拾う)七、八丁行きクッタラシ。五、六丁行きトミタビラ。五、六丁人家・ホキシロマ家。四、五丁過てマクンベツ(中州)。人家・アリケウトム家。三、四丁アシリビラ(大崖)。崖に立ち手前ニトマフ、向こうカブチャ。五、六丁過ぎてニトマフ・アラユク家。

14日 シルンケとエヨロサンの案内で出発、20丁過ぎてサオルコツ。向こう岸のヲカトマフに人家3軒・エチヤナレクル家地。二里余り過ぎてヒバウシ（小川）。人家2軒・シリコンナ家地。盗賊・イナヲクシに会う。

このあと武四郎は十勝川を下り、3月21日ヲホッナイ（大津）に到達する。そこで飯田と別れたあと銅路に至って、アカンからアバシリ越えの調査に向かうのである。

①～③を比較すると、佐幌岳山麓の宿営地からは、14日の①と②の記述では行路日程に相違が現れ、③では①②の日付と差が見える。②では14日の出発後早くにクタルナイへ、バンケシントクよりも先に到着した事になっている。①・③のルートはほぼ同じだが、③では聞き取りによる十勝川上流部の様子を、自らが踏査したものとして綴っている。そして、②も③と同じようにニトマフ泊から1日にかけて十勝川上流のオツウシまで見分し、ニトマフに戻って泊まったかのように記述したと考えられている。いずれもカムイロキに立ち寄り、十勝川上流部を踏査する際の目印に据えていたと言える。

#### ・地名について

屈足の語源となった地域はクタルシナイと、クタルウシとされ、範囲は佐幌岳の麓近くから新得台地上（上佐幌）から屈足にかけての想像以上に広範な範囲であり、その中にサツテキ川やトミピラといった小地名が含まれていたと理解される。サツテキは十勝川に合流することから、上流と下流で何度か横断することになり、文章の前後頻繁に出るサツテキの位置にも注意を払う必要がある。

これは、チャシコツ（図Ⅱ-13武四郎図）とニトマイ（ニトマフ）や、マクンベツ（中州）とピバウカの地名も同様で、チャシコツは②ではヲカトマフカリの傍にあり、③ではカムイロキから半里下の距離にあり所在地が複数と想像される。また、マクンベツ（中州）も十勝川に沿って複数ある。

1891年北海道開拓使発行の『北海道開拓使殖民選地図（図Ⅱ-13）』をみても、ニトマフの地が十勝川を挟んで東西でよばれていることから、現在地名として残る範囲よりも広く地名が使われていたことが解る。②『東西日誌』では、ピバウカについてアイヌの乙名（村長）シリコンナが、七八丁上流にも「ホンピバウシと云う小川一すじ有る」と武四郎に教えている。当時ピバウカの地が複数、もしくは広大な範囲で呼称していたことがあり、時代を経るにつれ現在の限定される地域に名称が残ったと思われる。ピバウカの地名を鍵に読むと①～③で示されるピバウシ川（ホンピバウシ）上流部を必然的に横断することから、実際のルートは新得町市街地付近で進路を東にとり、カムイロキ方面に向かったものと推測される。

#### ・生業について

『十勝日誌』では3月7日にサツテクベバレイ川付近でテシマ（かんじき）の跡をみつけ「氣に来たトカチの人のものだ」と狩猟するためにトカチアイヌが峠を越えて富良野地方に入ることや、仮小屋の作り方から出身地域が解ることを記している。佐幌岳の奥域はヒトマイ周辺のアイヌが日常的に狩りに出かける狩猟場だった。また、トムラウシ（トムラウシ）の地域へもピバウカやヒトマイのアイヌが狩猟場としていることが、『日誌』の12日の踏査及び聞き取りの際に記述される。そのほか、武四郎の立ち寄ったシュクラン家には「鹿皮が百枚計積重なり」と、地元のアイヌが多くの鹿を狩っていることが判る。遺跡から南方の「熊牛」の地名は「熊を狩る処」の意味があり、カムイロキ（熊が越冬する処の意味も持つ）と地理的に近いことから「熊の生活圏」に関連して考えることが出来る。

漁撈の面では、十勝川を登る鮭についてアラユクとシュルンケ二人の聞き取りから、上流のバンケベツ川付近まで遡上することが記され、更に『十勝日誌』ではニヘシヨチの地名を記して「鮭も此處迄にて是より上には上らざるよし」と十勝川本流での遡上の上限を記している。また、『東西日誌』にはニトマフを出てピバウシに至る道中に「チライ（イトウ）取の小屋有り」と記し、中流域に漁撈

の為の施設を作っていることがわかる。新得地域では以上の様な生業が行われているが、アイヌの人々だけではなく縄文人も、土器型式の広がりから見てこれら十勝川流域の特産品を持って峠を越えて内陸部と交流していたと思われる。武四郎の通った南富良野から佐幌を抜けて新得を経て屈足（カムイロキ）に至る「十勝入りルート」は、古くから往來の要路として存在していたのだろう。

### 3. 周辺の遺跡

現在、新得町内の遺跡は31か所を数える（図Ⅱ-16・表Ⅱ-2）。これらの遺跡は十勝川と、佐幌川の支流域に面した河岸段丘に沿って分布する傾向にある。遺跡の標高は約180～350mの範囲に収まる。十勝川流域に属する遺跡は21ヶ所、佐幌川流域の遺跡は9ヶ所みられるが、今後の開発行為によって新たな遺跡の発見が考えられる状況である。

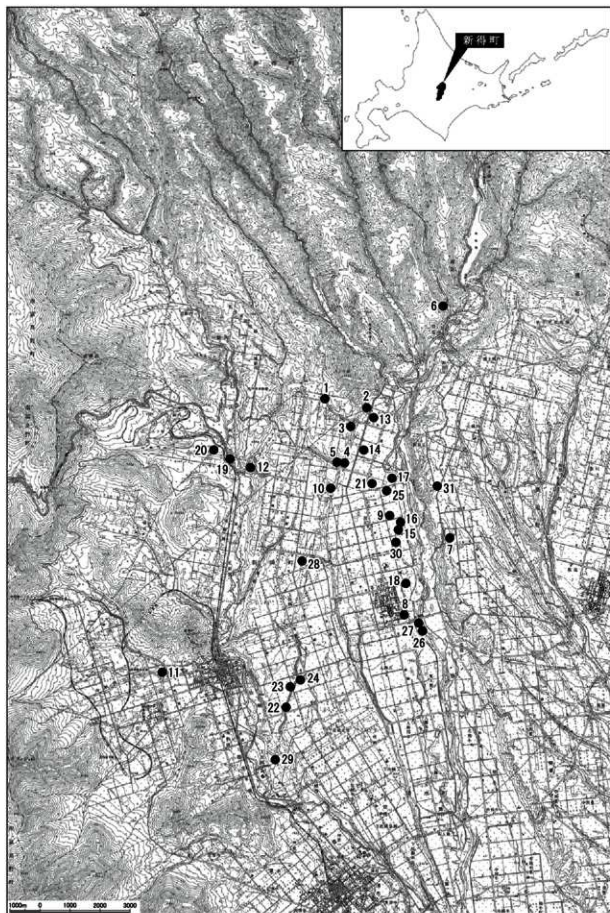
また、分布の傾向としては、縄文時代早期・前期は山間部に遺跡があり、中期から遺跡数が増加し、後期はやや減少し低位の河岸段丘部に纏まる。晩期は遺跡数が増加し分布範囲も広がる、続縄文期・弥文文化期に遺跡数は減少するが、アイヌ期はチャンガが確認される。佐幌川沿いの河岸段丘に臨川式的一条塚をもつもので十勝北西部に1ヶ所離れて確認されているものである。

町域での発掘調査は、屈足B遺跡（1989年町教委調査）、屈足11遺跡・屈足12遺跡（1999年町教委調査）に続き4例目となる。

遺跡名の「屈足」はアイヌ語に由来する「クッタラシ（イタドリが群生する処）」が転化したものとされる。しかし、今回の調査からその語源に違和感を覚える事が多く、クッタラシの語源については再検討が必要であろう。また、遺跡のある美笈台地の端部は「カムイロキ」と総称されていた可能性があり、カムイロキの対岸ではイナウを立てて、岩崖を神聖なものとして祀っていたという記述が武四郎の日記にある。十勝川を挟んだ対岸にはアイヌの祭祀遺構が多く残されている可能性がある。今後の十勝川に面する屈足面（地質的名称）での発掘調査では、集落遺跡や遺構の検出ばかりでなく、イナウ等の祭祀遺構についても注意を払って調査することが必要な地域と思われる。（富永）

表Ⅱ-2 新得町内の遺跡一覧表

番号	遺跡名	内容	時期	所在地	備考
1	パンケ遺跡	遺物包含地	縄文	新得町字上佐幌東1線123-2,東2線124	
2	屈足A遺跡	遺物包含地	縄文(中期)	新得町字屈足西1線88-1・3	
3	蓬田遺跡	遺物包含地	縄文(中期)、縄文(晩期)	新得町字新内東6線144-1,146-4	
4	屈足B遺跡	遺物包含地	縄文(中期)、縄文(晩期)	新得町字屈足西2線67-2	1989年町教委発掘調査
5	屈足C遺跡	遺物包含地	縄文	新得町字上佐幌785-31	
6	ニコロ武遺跡	遺物包含地	縄文	新得町字屈足基塚226-1～3,228-1・3	
7	屈足D遺跡	遺物包含地	縄文(晩期)	新得町字屈足2基塚3-3	
8	屈足E遺跡	遺物包含地	縄文(晩期)	新得町字屈足町東3丁目5	
9	屈足F遺跡	遺物包含地	縄文(前期)、縄文(中期)、縄文(晩期)	新得町字屈足東1線4丁目2	
10	上佐幌遺跡	遺物包含地	縄文	新得町字上佐幌618-2	
11	広内遺跡	遺物包含地	不明	新得町字新得西3線50-2・3,52-2・4	
12	新内チャンシ跡	チャンシ跡	アイヌ	新得町美多良川河川敷	
13	屈足G遺跡	遺物包含地	不明	新得町字屈足西1線87-1	
14	屈足H遺跡	遺物包含地	不明	新得町字屈足西1線75-4	
15	屈足9遺跡	遺物包含地	縄文(前期)、縄文(晩期)	新得町字屈足東2線40-1	
16	屈足10遺跡	遺物包含地	縄文	新得町字屈足東2線40-4	
17	屈足11遺跡	遺物包含地	縄文(晩期)	新得町字屈足東1線68-5,69-1・3,70-1～6,72-3～6,73-1,74-1・5・7・9・10	1999年町教委発掘調査
18	屈足12遺跡	遺物包含地	縄文(晩期)	新得町字屈足東1線19-12	1999年町教委発掘調査
19	下新内1遺跡	遺物包含地	縄文	新得町字新得9634-3	
20	下新内2遺跡	遺物包含地	縄文	新得町字新内175	
21	佐幌1遺跡	遺物包含地	縄文	新得町字上佐幌西3線128-1	
22	佐幌2遺跡	遺物包含地	縄文	新得町字上佐幌西2線7-2・3	
23	佐幌3遺跡	遺物包含地	縄文	新得町字上佐幌西1線14-4・8	
24	佐幌4遺跡	遺物包含地	縄文(中期)	新得町字上佐幌西1線13-1・2	
25	屈足13遺跡	遺物包含地	縄文	新得町字屈足東1線54-2・3	
26	屈足14遺跡	遺物包含地	縄文(晩期)	新得町字屈足東1線1-1地先河川敷	
27	屈足15遺跡	遺物包含地	縄文(中期)、縄文(晩期)	新得町字屈足東1線1-1	
28	上佐幌2遺跡	遺物包含地	縄文	新得町字上佐幌東1線742-1,743-2	
29	下佐幌遺跡	遺物包含地	縄文(晩期)	上川郡新得町字下佐幌西4線121-1	
30	屈足16遺跡	遺物包含地	縄文	新得町字屈足東1線35-1・7	
31	屈足17遺跡	遺物包含地	縄文	新得町字屈足2基塚784-16	2016年北海道埋蔵文化財センター



図Ⅱ-16 新得町内の遺跡

## Ⅲ章 調査の方法

### 1. 発掘区の設定

発掘区の設定にあたっては、北海道十勝総合振興局の農道整備特別対策事業新屈足地区設計計画平面図（平成25年4月 縮尺1:1000）を使用した。発掘区東西方向の基軸線は、当初予定の工事接合線の付近のSP1178014の方位線を東西の基軸とし（図I-3 図版4）、南北方位線のうち調査区西端部にかかるラインを1ラインとし、東と西側に向かって算用数字を使用した（1-11ライン）。南北方向の基軸線は調査区北端部にかかる1ラインと直交する線をAラインとし、北から南にアルファベットの太文字を使用し呼称した（A-Mライン）。

発掘区は5m×5m（図版7）とし、北西隅交点のアルファベット文字と数字の組み合わせで呼称している（図I-4）。例えば、Aラインと1ラインの交点の南東側は、A1区となる。なお、必要に応じて一つの発掘区を四等分し、グリッド名の後ろにa～dの小グリッドを設けている。基軸線の基準点に用いた調査区F6杭の座標成果値は以下のとおりである。また、水準点は北海道開発局が設置した4級基準点T-16（H=314.544m）を使用した。

屈足17遺跡 F6杭の測量成果は次の通りである。（世界測地系）

F6 X = -95110.099 Y = 107899.715

T16 X = -95189.774 Y = 107842.959

なお、4級基準点T16の緯度、経度については、緯度43°08'07.6967"、経度は142°55'27.8337"となっている。

（富永）

### 2. 発掘調査の方法

#### 表土除去

調査に先立ち、重機によって表土除去を行った。表層の牧草部分を除去したところ、部分的ではあったが、遺物が多量に検出されたので、以下を手掘りすることとした。

#### 包含層調査

遺物の包含状況を計るため、表土除去面に露出した遺物に竹串で目印を付けていった。そうしたところ、G-15～7区に遺物の集中が確認された。一方、ほかの地点は、ごく少数の遺物が散在している状況であった。また、数か所トレンチを掘って、調査区の土層堆積状況を確認した。

その後、遺物が散在する地点の遺物包含状況を知るために、C4区、D2区、E4区、F6区、J7区、K8区などの調査を行ったが、ほとんど遺物は確認されなかった。また、試掘時よりも黒色土が厚い地点が調査区の半分ほどの範囲であることも判明した。さらに、遺物集中地点の下部層で、想定外の縄文時代早期の遺物が出土した。そこで、遺物集中グリッドのみ全層手掘りとし、ほかの調査区は重機により黒色土を除去して、遺構の確認をする、という調査手順とすることにした。

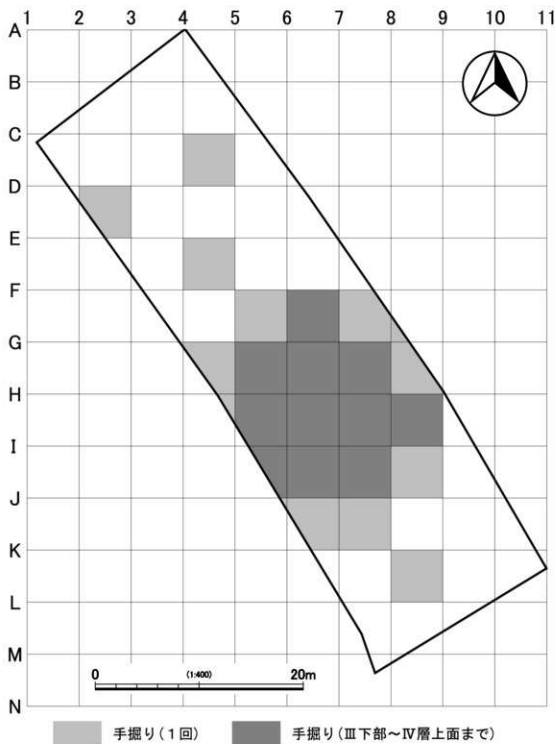
#### 遺物の取り上げ

包含層の遺物は、遺跡名・発掘区・層位・日付を記録し、グリッド単位で取り上げた。

#### 調査最終面地形測量

調査の終了後、V層上面の精査を行い、遺物・遺構がないことを確認して、調査終了とした。この終了面において測量を行い、調査最終面の地形図を作成した。

（福井）



図Ⅲ-1 発掘調査の方法

### 3. 整理の方法

#### (1) 土器

現地と江別（センター）では、遺物を水洗、乾燥後に、遺物台帳と遺物カードを作成し、遺物に注記作業を行った。注記は屈足17遺跡を「ク17」と略記し、遺構・調査区名、出土層位、遺物番号の順で可能な限り簡略して記入した。二次整理では、各破片の個体識別に努め、接合作業と並行して分類・変更等の精査を行った。土器の接合復元作業では、包含層の接合関係の把握に努めた。実測図の作成にあたっては、残存率が高く個体の特徴がよく表れる面を正面としている。破片資料は、遺跡の内容をよく表すもの、特徴的なものを拓影に選別し掲載した。

#### (2) 石器

石器は、分類別に整理し収納した。剥片は石材ごとに分け、接合作業を行っている。接合資料については遺物台帳に記入した。報告書掲載遺物は、遺構・包含層から良好な残存状況で、特徴的形態をよく表すものを選別し、図化・撮影作業をおこなった。図化の際には、「長さ」・「幅」・「厚さ」・「重さ」の計測を行い一覧表に示している。また、必要に応じて観察の所見を述べている。

これらの作業と並行し遺物分布図の作成、接合関係図の作成、遺物台帳のデータベース化、集計作業を行っている。写真撮影は基本的に掲載遺物全点について行った。整理作業の終了した遺物は、報告書掲載資料、発掘区（包含層）に分けて収納を行っている

### 4. 遺物の分類

#### (1) 土器

出土した資料には縄文時代早期から晩期の各時期および続縄文時代に属するものがある。現地整理の段階から土器は便宜的に、縄文早期をⅠ群、前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群、続縄文時代をⅥ群、擦文時代をⅦ群と分類し、各群の前半をa類・後半をb類。あるいは前葉をa類、中葉をb類、後葉をc類としている。

#### 分類

##### Ⅰ群 縄文時代早期に属する土器群

- a類 貝殻文が施されるもの。
- b類 縄文・捺糸文・絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文等の施されているもの。

##### Ⅱ群 縄文時代前期に属する土器群（\*今回は出土していない）

- a類 縄文の施された丸底、尖底を特色とするもの。美沢3式、網文式、トビノ式、静内中野式に相当するもの。
- b類 円筒下層式に併行するもの。フゴッペ貝塚式、植苗式、大麻V式、宮本式、シュブノツナイ式に相当するもの。

##### Ⅲ群 縄文時代中期に属する土器群（\*今回は出土していない）

- a類 円筒上層式に併行するもの。萩ヶ岡1式・2式、厚真I式に相当するもの。
- b類 中期後半に属するもの。天神山式、柏木川式、北筒式（トコロ6類）、煉瓦台式に相当するもの。

##### Ⅳ群 縄文時代後期に属する土器群

- a類 余市式、タブコブ式、手稲砂山式、入江式に相当するもの。
- b類 ウサクマイC式、手稲式、ホカ潤式、船泊上層式、エリモB式に相当するもの。
- c類 堂林式、三ツ谷式、御殿山式に相当するもの。

##### Ⅴ群 縄文時代晩期に属する土器群



- a類 大洞B式、BC式に相当ないし併行するもの。上ノ国式、東三川式に相当するもの。
- b類 大洞C1式、大洞C2式に相当ないし併行するもの。美々3式、ママチⅠ・Ⅱ群に相当するもの。
- c類 大洞A式、大洞A'式に相当ないし併行するもの。タンネットウL式、氷川式、ママチⅢ・Ⅳ・Ⅴ群に相当するもの。

**Ⅴ群** 統縄文時代に属する土器群（\*今回は出土していない）

## (2) 石器

以下の通りに分類した。

### 石鏃

両面調整の石器で三角の尖頭部を持つもの。無茎鏃、有茎鏃

### 石槍

厚みのある素材に押圧剥離や平坦剥離による加工を施した両面調整の石器で、三角の尖頭部を持つもの

**両面調整石器・石鏃**（\*今回は出土していない）

### つまみ付きナイフ

剥片の一端に紐かけのつまみ部を持つもの

### スクレイパー

剥片の縁辺に急角度の刃部を作り出している石器で上記の分類に当てはまらないもの。形態は様々で、縦長剥片、横長剥片、刃部がV字状のもの、湾曲したもの、三角形のもの、円形のもの  
**フレイク・Rフレイク・Uフレイク**

石器製作時に出た石片で、二次的な剥離をうけていないものをフレイクとした。チップも含める。フレイクに2次加工が施されるが、用途と形態が不明確なものをRフレイク、使用痕のあるものをUフレイクとした。

### 石核

石器母材から剥片を取ったあとに残ったもの

### 石斧

礫素材の一端に研ぎ出された、主に両刃の刃部をもつもの。小型の石ノミ状のものも含める

### たたき石

礫を素材とし、素材の主面、または側面に敲打痕をもつもの

### すり石

礫素材の石器で主面、または側面にすり痕をもつもの。いわゆる「北海道式石冠」もすり石に分類している

**扁平打製石器・石鋸・有溝砥石・石錘**（\*今回は出土していない）

### 砥石

石器等を研磨するのに使われたもの。いわゆる「矢柄研磨器」も砥石に分類している

### 台石・石皿

礫を素材とする石器のうち大型で敲打痕、すり痕があり高且つそれが受動的と解釈できるもの

### 礫

遺跡内で出土する礫はすべて取り上げた。また、遺跡内で本来礫が存在し得ない場所で礫が出土した場合、人為的な持ち込み品として有意の礫に区別した。

(富永)

## 5. 基本層序

調査区は、北東-南西方向へ、緩やかに傾斜した段丘面である。基本的な土層は、調査区全域で大きく変化していないとみられる。土層の記載には、『土壌調査ハンドブック』（日本ペトロロジー学会編 2000）を参考にし、土色、土性、粘性、堅密度、含有物とその含有率について記載した。土色については『新版標準土色帖』（小山・竹原 2004）を用いた。層厚については、削平を受けるなどし、地点によって大きく異なるために、ここに記載しなかった。

**I層** 表土：現代の耕作による攪乱を受ける。黒色（10YR2/1）。砂壤土。下位層のテフラを含む。

**II層** 火山灰層：にぶい黄褐色（10YR5/3）。沢頭部分など一部で確認された。Ta-a・b、Ko-cの可能性ある。

**III層** 黒色土

・III-1層：黒色（10YR1.7/1）。壤土。一部で確認された。炭化材片含む。1330±20yrBP（IAAA-161423）。

・III-2層：黒色（10YR2/1）。壤土～埴壤土。上下より淡く明るい。

・III-3層：黒色（10YR1.7/1）。壤土～埴壤土。漆黒色で、粘性やや高い。沢付近では、さらに上下に分層された。

・III-3①層：黒色（10YR1.7/1）。埴土。

・III-3②層：黒色（10YR2/1）。埴壤土。黒褐色土ブロックを混入するので、攪乱的。

・III-4層：黒色（10YR2/1～3/1）。埴壤土～埴土。フレイク状のロームブロック混入、攪乱的。6780±30yrBP（IAAA-161424）。

**IV層** 漸移層：黒褐色（10YR3/2）。

**V層** ソフトローム層：にぶい黄褐色～明黄褐色（10YR5/4～6/6）。埴壤土～埴土。褐鉄鉱が沈着する。地点により、グライ化する。下部は上部より粘性ある。12210±40yrBP（IAAA-161425）。

**VI層** ハードローム層：にぶい黄褐色～明黄褐色（10YR7/6～7/4）。埴土。褐鉄鉱が沈着する。上層より粘性強く、グライ化する。下部は上部より粘性ある。

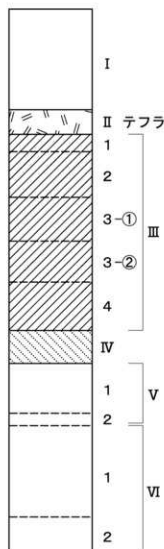
土層堆積柱状模式図は、調査区全体の土層をもとに作成したものである。また、上記炭素年代測定値は、各層検出炭化材の測定結果で、詳細はVI章1に掲載した。

縄文時代後期前葉の遺物は、I～III-3層上部に含まれていたが、多くはI層で検出したので、実際には、III-1層～III-2層に含まれたものとみられる。縄文時代前半期・早期貝殻文期の遺物は、III-3・4層で僅かに検出された。縄文時代早期晩式期の遺物は、漸移層で僅かに確認された。

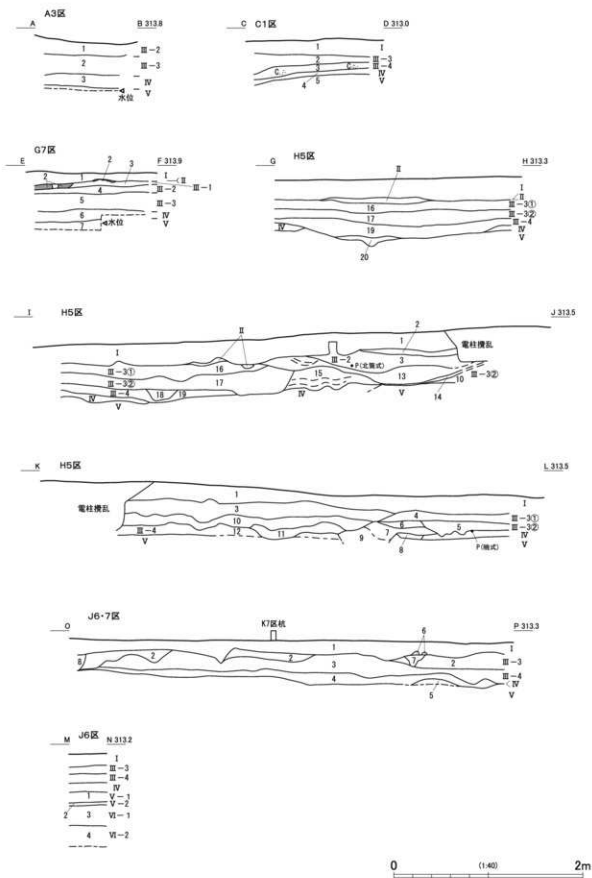
なお、III層掘削後のIV層～V層上面では、シカ足跡、湧水痕跡を確認した。

III層下部にみられた攪乱的な土層は、間歇的な湧水によって、繰り返し泥沼化したためのものと考えられている。特に、沢頭がみられたH5区では、斜交した堆積が認められた。（福井）

## 基本層序



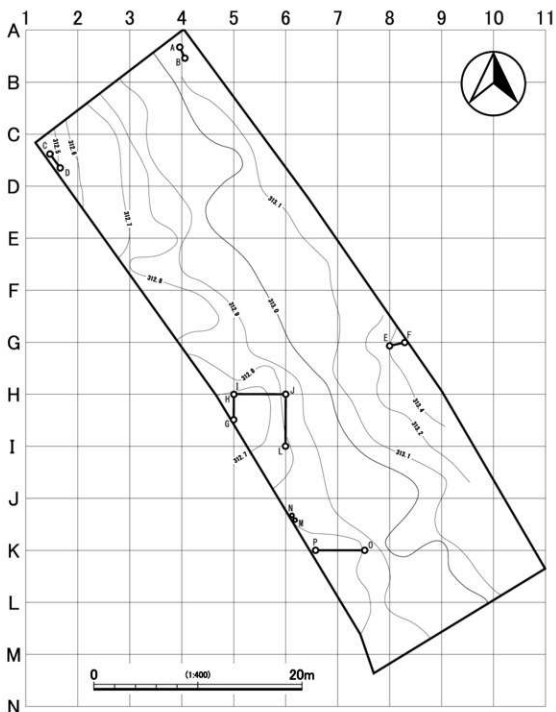
図III-2 土層柱状図



図三-3 土層断面図

表Ⅲ-1 土層注記一覧表

A3区							
No.	土色		土性	粘性	堅密度	混入物	備考
1	黒色	10YR 2/1	塊壤土	弱	すこぶる堅	最上部炭化材1%	深く明るい
2	黒色	10YR 1.7/1	塊壤土	弱	すこぶる堅		漆黒、粘性やや強い
3	黒褐色	10YR 3/2	塊壤土	弱	堅	ローム粒・炭化材1%	漸移層
C1区							
No.	土色		土性	粘性	堅密度	混入物	備考
1	黒色	10YR 2/1	砂壤土	弱	すこぶる堅	ロームブロック10%	茶色味がかかる、表土
2	黒色	10YR 1.7/1	塊土	弱	堅		
3	黒色	10YR 2/1	塊土	弱	堅	ロームブロック(フレーク状)・炭化物7%	灰色味がかかる
4	黒褐色	10YR 3/2	塊土	弱	堅		漸移層
5	にぶい黄褐色	10YR 5/4	塊土	弱	すこぶる堅	高脚小僧	砂質、ローム
G7区							
No.	土色		土性	粘性	堅密度	混入物	備考
1	黒色	10YR 2/1	砂壤土	弱	すこぶる堅	Ta-c70%	表土
2	にぶい黄褐色	10YR 5/3	砂壤土	弱	すこぶる堅		Ta-c: 上位粗粒・下位細粒
3	黒色	10YR 1.7/1	塊土	弱	すこぶる堅	炭化材料5%	
4	黒色	10YR 2/1	塊土	弱	すこぶる堅		深く明るい
5	黒色	10YR 1.7/1	塊壤土	弱	すこぶる堅		漆黒、粘性やや強い
6	黒褐色	10YR 3/1	塊壤土	弱	すこぶる堅		漸移層
7	にぶい黄褐色	10YR 4/3	塊土	弱	すこぶる堅	上部で炭化物5%	ローム
H5区							
No.	土色		土性	粘性	堅密度	混入物	備考
1	黒色	10YR 2/1	砂壤土	弱	すこぶる堅	Ta-c10%	表土
2	黒色	10YR 1.7/1	砂壤土	弱	堅		
3	黒色	10YR 2/1	砂壤土	弱	堅		ボクボクしている
4	黒色	10YR 1.7/1	塊土	弱	堅		
5	黒色	10YR 2/1	塊壤土	弱	堅	黒褐色土(10YR3/2)ブロック20%	ボクボクしている
6	黒色	10YR 2/1	塊壤土	弱	すこぶる堅	黒褐色土(10YR3/2)ブロック40%	
7	黒褐色	10YR 3/1	塊土	弱	すこぶる堅	黒褐色土(10YR3/2)ブロック50%	
8	灰黄褐色	10YR 4/2	塊壤土	弱	すこぶる堅	黒褐色土(10YR3/2)ブロック40%	
9	黒褐色	10YR 3/2	塊壤土	弱	すこぶる堅	ロームブロック50%	
10	黒色	10YR 1.7/1	塊土	弱	堅	黒褐色土(10YR3/2)ブロック20%	ボクボクしている
11	黒褐色	10YR 3/1	塊壤土	弱	堅	クロボクブロック30%	
12	黒褐色	10YR 3/2	塊壤土	弱	堅	クロボクブロック・ロームブロック30%	
13	黒色	10YR 2/1	塊壤土	弱	堅	黒褐色土(10YR3/2)ブロック20%	ボクボクしている
14	黒褐色	10YR 3/2	塊土	弱	堅		粘質、砂も感じる
15	黒褐色	10YR 3/1	塊壤土	弱	堅	ロームブロック7%	平行に層理あり
16	黒色	10YR 1.7/1	塊土	弱	堅		
17	黒色	10YR 2/1	塊壤土	弱	堅	黒褐色土(10YR3/2)ブロック20%	ボクボクしている
18	黒色	10YR 2/1	塊壤土	弱	堅	黒褐色土(10YR3/2)ブロック30%	粘質
19	黒褐色	10YR 3/1	塊壤土	弱	堅	黒褐色土(10YR3/2)ブロック30%	粘質
J6・7区							
No.	土色		土性	粘性	堅密度	混入物	備考
1	黒色	10YR 2/1	砂壤土	弱	すこぶる堅	砂粒5%	表土、遺物包含
2	黒色	10YR 1.7/1	塊壤土	弱	すこぶる堅		遺物包含
3	黒色	10YR 2/1	塊壤土 ~塊土	弱	すこぶる堅	ロームブロック(フレーク状)10%	粘質
4	黒褐色	10YR 3/2	塊土	弱	すこぶる堅		粘質、漸移層
5	にぶい黄褐色	10YR 4/3	塊土	弱	堅	高脚小僧	粘質、グライ化、砂質、褐鉄鉱沈着、ローム
6	黒褐色	7.5YR 3/2	砂土	なし	すこぶる堅		チフラブロック
7	黒色	10YR 1.7/1	塊壤土	弱	すこぶる堅		1+2+6層
J6区							
No.	土色		土性	粘性	堅密度	混入物	備考
1	明黄褐色	10YR 6/6	塊壤土	弱	堅	褐鉄鉱粒散在	
2	明黄褐色	10YR 6/6	塊土	弱	堅	褐鉄鉱粒15%	1より粘性ある
3	明黄褐色	10YR 7/6	塊土	中	堅	褐鉄鉱粒15%	
4	にぶい黄褐色	10YR 7/4	塊土	中	堅	褐鉄鉱粒15%	3より粘性強い



図Ⅲ-4 V層上面の地形と土層断面実測位置図

## IV 調査の結果

**石器ブロック1 (Sb-1) :** G-J 5~7区のI層~III層で確認された。特に、H・I 6区で濃密に集中していた。石器はI層に多く含まれたが、III層上部(III-1~2層)が元々の包含層位とみられる。含まれる石器の多くが、フレイクであった。フレイクは、いずれも薄く、湾曲するもので、両面調整尖頭器の調整剥片(ポイントフレイク)と考えられる。定形的な石器では、石槍が多かったので、ほとんどが石槍の調整剥片とみられる。それ以外には、ごく僅かに石鏃、スクレイパー、ノッチ(写真掲載31)、つまみ付きナイフが含まれた。土器は少なかったが、北筒Ⅳ式が出土している。

**湧水跡 :** 主にIII層除去後の、IV層~V層上面で検出された。湧水跡は、三種が確認され、①盃状の小穴に、同心円状のラミナが明瞭な灰色砂層が堆積した湧水ピット(直径4~9cm)、②盃状の小穴に、同心円状のラミナが明瞭な黒色砂層が堆積した湧水ピット、③土壌がグライ化し、亀甲上のひび割れが伴う湧水凹部(直径1m前後の皿状窪み)があった。

③からは実際に湧水が確認された。①と②は堆積土の違いから、時期差を示す可能性がある。③の窪みには、漸移層が堆積する場合と、黒色土が堆積する場合がみられたが、前者が多かった。いずれの湧水跡にも、V層を貫く微細な砂脈が連結している。その砂脈は、複数あり、紆余曲折しながら、湧水跡へ接続する。

このような湧水は、台地崖際の地表に噴出し、急な沢に集まり抜けていったものと考えられる。それによって、台地西側の崖際は泥濘化しやすかったとみられる。地主の方の話でも、いつも泥濘化する部分があったということ聞いた。現在でも雪解け後や降雨後、調査区周辺に水が集まり、泥濘化し、発掘を困難なものにした。III層下部の攪乱的な堆積状況は、このことを示していると思われる。

なお、この地点の湧水は、連続的なものではなく、間歇的なものであることを特徴としている。

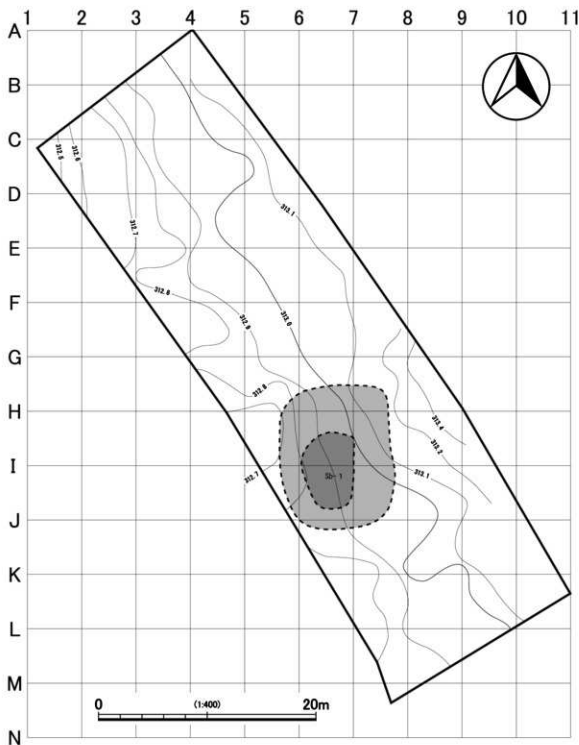
**シカ足跡 :** H 5区沢頭周辺に多数みられた湧水跡に隣接していた。シカの足跡に特有なハの字状の明瞭な窪みは少なく、杉の葉状の窪みや、対になる細長い溝状の窪みなどが観察された。これらについて、現生のシカ足跡などと比較したところ、複数の足跡が連続的に付いた場合は杉の葉状になり、足を滑らせた場合は対の溝状になることが確認できた。したがって、今回確認された足跡は、ほぼシカによって残されたものと考えられる。シカ足跡の蹄部分は、長さ約6~6.5cm、幅約2.5~3cmあった。現生のシカの足跡を計測したところ、長さ6~7cm、幅2cmであったので、検出したものはやや大きい。

シカの足跡の覆土は黒色土であり、足跡は漸移層~ローム層に2cmほど食い込むことで確認されたことから、各土層は全体に水分を含み泥濘化しており、そこへシカが足を踏み入れたことを示すとみられる。時期は、黒色土下部堆積時と考えられるので、縄文時代前半期とみられる。なお、C 1区Ⅲ-4層検出炭化材の年代測定値は6780±30yrBP (IAAA-161424)であった。そして、湧水痕も含めた状況から、この地点はヌタ場と呼ばれる間歇的に出現する浅い泥沼であったと推定された。

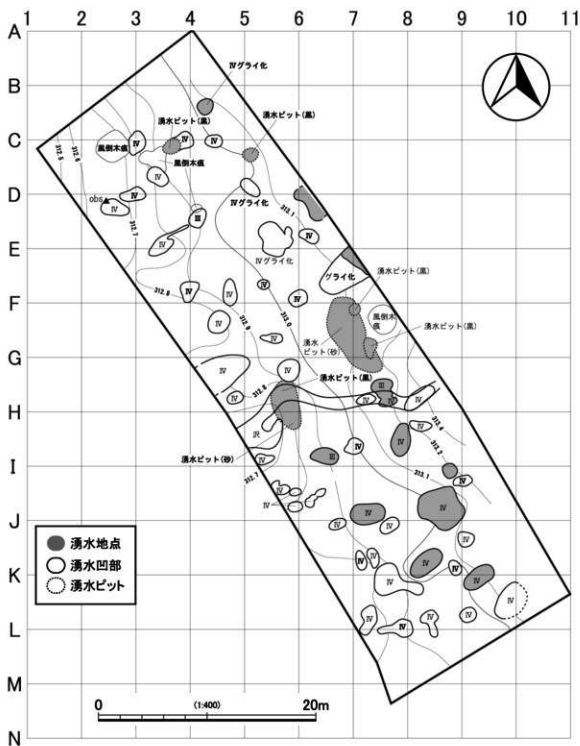
特に重要なのが、シカ足跡内から黒曜石製チップ2点を検出したことである。つまり、このことによって、ヌタ場にシカが集まっただけでなく、人も同時期に集まっていた、つまり狩りをしていただことが想定される。シカがヌタ場に集まるのは、泥浴びをするため、好む時期は、秋の繁殖期とされる。ヌタ場で、角を研いだり、自分の尿を含む泥を全身に帯びたりすることで、繁殖に備えるという。**沢頭跡 :** H 5区、III層除去後の、IV層~V層上面で、III層の落ち込みとして確認された。なお、上位では、明瞭にII層の落ち込みが確認されたため、縄文時代を通して小沢頭であったものと考えられる。沢頭が確認された周囲の土層を確認したところ、III層下部(III-3-②層・Ⅲ-4層)では、黒色土やロー

ムブロックが斑状に含まれており、当初、遺構の覆土を想定したほどの様相を呈していた。最終的に、この状況は、湧水の影響を受け泥沼状となっていたための結果と考えるにいたった。

(福井)

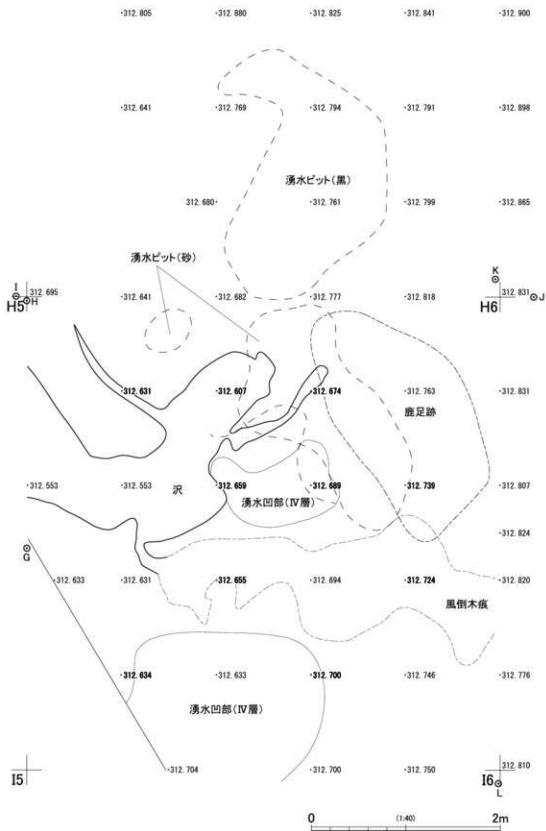


図N-1 石器ブロック1

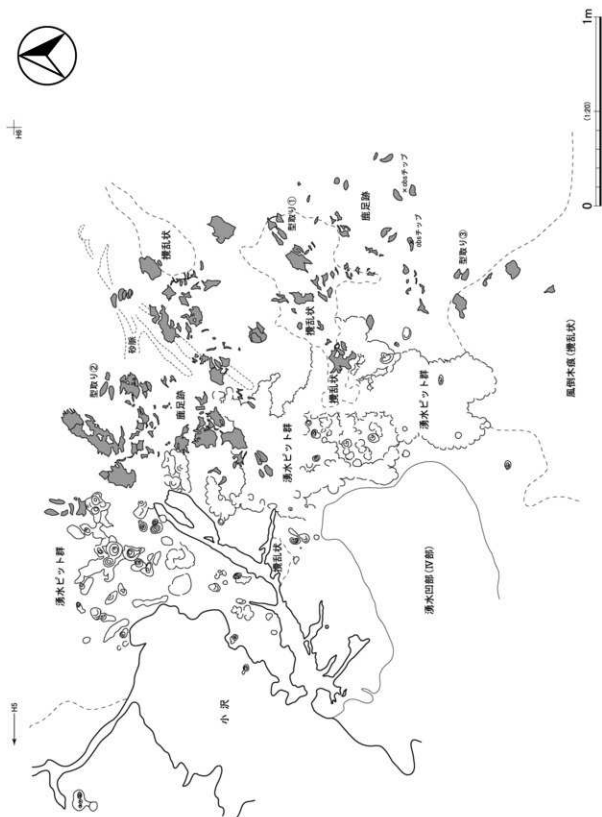


図IV-2 湧水跡





図IV-3 沢頭跡・湧水跡・シカ足跡(1)



図IV-4 沢面跡・湧水跡・シカ足跡(2)



図N-5 沢頭跡・湧水跡・シカ足跡(3)



表M-1 フレイクチップ重量一覧表

調査区	石器重量 (g)	合計 (g)
B4	0.13	0.13
C3	0.08	
C4	0.79	0.87
D3	0.13	0.13
E4	1.75	
E6	0.22	
E7	0.50	2.47
F5	24.42	
F6	35.78	
F7	9.39	69.59
G4	15.50	
G5	41.19	
G6	467.10	
G7	241.02	
G8	0.21	765.02
H5	173.53	
H6	3275.30	
H7	1718.90	
H8	5.46	5173.19
I5	52.64	
I6	1803.68	
I7	809.29	
I8	12.57	2678.18
J6	130.96	
J7	221.77	
J8	4.01	
J不明	1.34	358.08
K7	0.32	
K8	9.06	9.38
表採	117.71	117.71
総計		9174.75

※足跡出土フレイク写真掲載32・33

表N-2 遺物出土点数一覧表

調査区	層位	土器				割片石器群				礫石群						石割計	総計					
		I	IV	V	計	石楯	石槍	つまみ付きナイフ	スクレイパー	プレイク	計	石斧	石斧原石	たたき石	すり石			くぼみ石	台石	礫	計	
B4	I層									1	1									3	1	
C3	I層									1	1										1	1
C4	I層									3	3										3	3
D2	IV層									1	1										1	1
D3	I層									2	2										2	2
E4	I層									15	15						1	1			16	16
F6	I層									2	2										2	2
E7	I層									2	2										2	2
F5	I層									2	64										66	66
	I層									1	180										181	184
	II層										4										4	4
	III層										6										6	6
	IV層										1										1	1
	計									1	2	191			1					1	195	195
F7	I層										84										84	84
G4	I層										44										44	46
	I層										160										161	162
	II層		1		1		1				11										11	12
	IV層		1																		0	1
	計		1	2	3		3				171										172	175
	I層			3	3		3				2509										2513	2516
	II層										322										323	323
	計			3	3		3				2831										2836	2839
	I層										1										1	1
	II層										1456										1459	1459
	III層										49										50	50
	IV層										18										18	18
	計										1	1523			1						1527	1527
	I層										2										2	2
	II層		2	4	6		1				565										566	573
	III層		1								27										27	28
	IV層										7										7	7
	計		1	2	4		7				539										540	547
	I層										11235										11257	11257
	II層										3765										3777	3777
	III層										1399										1402	1407
	IV層										27										27	29
	計		1				1				16426										16463	16470
	I層										1										1	28
	II層										5167										5202	5202
	III層										367										367	367
	IV層		7								195										195	196
	計		7	1			8				3	5729			1						5764	5772
	I層										18										18	19
	II層										10										11	11
	計										28										29	30
	I層										226										227	227
	II層										39										40	40
	計										2	265									267	267
	I層										6340										6378	6381
	II層										1738										1756	1759
	III層										16										17	18
	計										8094										8155	8158
	I層										4										4	18
	II層										3543										3558	3569
	III層										677										685	687
	計										1	4220									4243	4256
	I層										53										56	56
	II層										360										362	363
	III層										4										4	6
	計										3	364									366	369
	I層										976										980	980
	II層										0										0	1
	III層										1										1	1
	計										4	977									982	982
	I層										34										34	34
	II層										2										2	2
	III層										50										52	52
	IV層										0										0	3
	計										1	97									98	98
	I層										1159										1159	1160
	II層										1159										1159	1160
	計										1	8	42876								43047	43126

## V章 出土遺物

包含層の土器 (図・表V-1 図版13)

### I群 縄文時代早期 (I群)

1~2はテンネル・晩式に相当する。1は器面の摩耗が激しく混和材の砂粒が浮き出している。2は外面を縦条痕調整。内面はナデ調整。3~4は大楽毛式に相当する。1・2ともに胴部破片。3・4は底部破片。4は中央に貫通孔を持つ。貫通孔は焼成前に開けられている。

### IV群 縄文時代後期 (IV群a類)

5~8は北筒IV式に相当する。5~6は口縁部破片でやや厚手のもの。口縁部外方のタガ状の貼付帯中に円形の刺突が施される。5・7は貼付帯の下位付近に斜め下から斜角に刺突が施される。内面はナデ調整。

### V群 縄文時代晩期 (V群c類)

タンネトーL式に相当する。8は胴部破片。土質と器厚の薄さから晩期のものとした。細い粘土紐の貼付けが一部にみられる。

包含層の石器 (図V-1・2 表V-1 図版13)

### 石鏃 (全て黒曜石製)

両面調整の石器で三角の尖頭部を持つもの。すべて有茎鏃である。9~12は特に入念に両面から調整が施される (9は細身なことから石鏃に含めた)。10は尖頭部と茎部の長さがほぼ一致する。基部側縁が並行で、茎部が先頭部よりも長い。11~12は尖頭部が長いもの。11は翼状の返しが明瞭で、外面が被熱する。

### 石槍 (全て黒曜石製)

石槍は13~21である。包含層からは158点出土している。欠損品も廃棄行為 (送りのな) の上で遺棄されたものと考えただけ掲載に努めた。厚みのある素材に押し剥離や平坦剥離による加工を施した両面調整の石器で、三角の尖頭部を持つ長軸5cm以上 (破損し満たないものも含めている) のものである。13~21の形状は何れも菱形を呈し相似的である。13は基部が明確に作出される。14~21は基部が不明瞭な柳葉形を呈する。14は尖頭部の側縁がやや外湾気味である。19は尖頭部の側縁がやや内湾気味。

### スクレイパー (全て黒曜石製)

剥片の縁辺に急角度の刃部を作り出している石器で、上記の分類に当てはまらないもの。形態は様々で、縦長剥片素材のもの、横長剥片素材のもの、刃部がV字状のもの、湾曲したもの、三角形のもの、円形のものがある。22は円形のもの。23は素材の形状を利用し片面加工されたもの。24は両面加工が施され楔形の形状を呈する横長剥片素材のもの。石槍の未成品を転用した可能性を考えている。

### 石斧

礫素材の一端に研ぎ出された、主に両刃の刃部をもつもの。25は石斧の完形品。側面には擦切り手法の研磨が行われる。柄に括りつけた擦痕は目立たない。頂部付近に貫通孔が設けられることから装身具の可能性もある。

### すり石

礫素材の石器で主面、または側面にすり痕をもつもの。27はいわゆる「断面三角形すり石」。薄い縁辺を擦り面として利用したもの。

### たたき石

礫を素材とし、素材の主面、または側面に叩き痕をもつもの。28は片面に敲き痕がみられ、扁平

な板状の素材の縁辺にも叩き痕がみられる。

くほみ石

29は片面に径2cm程の窪みを残す。発火装置の回転棒の抑え道具に用いられた可能性がある。

台石・石皿

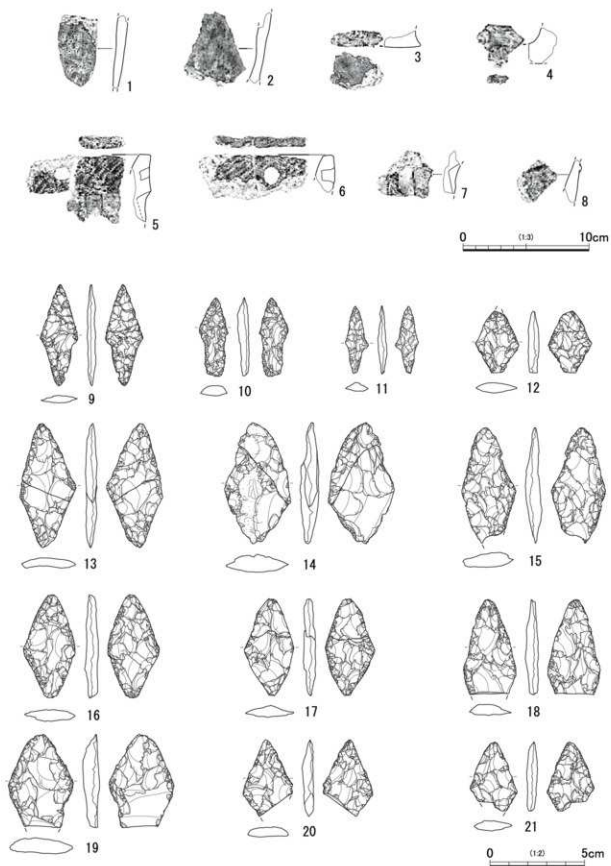
礫を素材とする石器のうち大型で敲打痕、すり痕があり、尚且つそれが受動的と解釈できるもの。厚手扁平な礫素材を用いる。30は平坦な片面に擦痕がみられる。

表V-1 掲載遺物一覧表

V専横敷土器											
図版番号	日付	調査区・遺構	遺物番号	層位	種別	分類	点数	細文	備考		
1	6月29日	G5	3	IV	土器	1a(テンネラ焼)	1	—	銅部片		
2	6月8日	H6	1	IV	土器	1a(テンネラ焼)	1	—			
3	5月24日	H7	1	IV上面	土器	1a(大塚式)	1	—	銅部片 同一個体(図版番号3, 4)		
4	6月24日	H7	1	IV上面	土器	1a(大塚式)	2	—			
5	6月13日	G6	1	I	土器	IV	2	L[R2]	G6(3点)、I7(2点)の5点で接合		
6	5月18日	H5	1	I	土器	IV	1	L[R2]	H5(1点)、J6(1点)の2点で接合		
7	5月18日	※	2	III-1	土器	IV	2	—			
8	5月19日	H5	2	I	土器	V	2	—			
V専横敷土器											
樽田1	7月7日	樽田家	8	表採	土器	V	1	L[R2]	口縁部		
樽田2	7月7日	樽田家	9	表採	土器	V	1	L[R2]	口縁部		
樽田3	7月7日	樽田家	10	表採	土器	V	1	L[R2]	器物番号9(1点)、10(2点)の3点で接合		
安濃1	7月7日	安濃家	14	表採	土器	V	1	L[R2]	口縁24.5高34.0底径9.0(cm)		
安濃2	7月7日	安濃家	15	表採	土器	V	1	L[R2]	底径8.0(cm)		
安濃3	7月7日	安濃家	16	表採	土器	V	1	L[R2]	胴部文様		
安濃4	7月7日	安濃家	16	表採	土器	V	1	L[R2]	胴部文様		
安濃5	7月7日	安濃家	19	表採	土器	V	1	不明	口縁部		
安濃6	7月7日	安濃家	19	表採	土器	V	1	不明	口縁部		

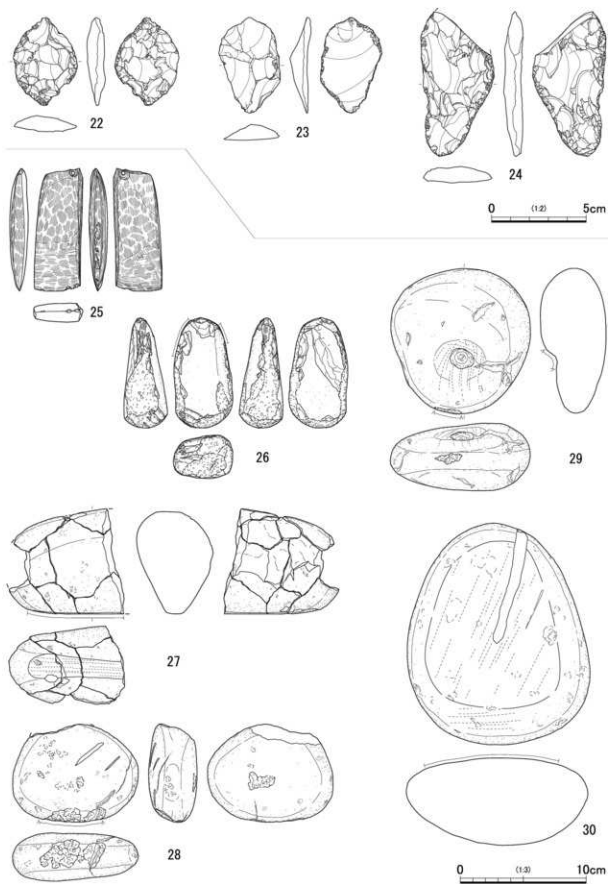
V専横敷石器													
図版番号	日付	調査区・遺構	層位	種別	分類	破片番号	備考	点数	長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材
9	6月15日	H6	II	石器	石鏡			1	5.30	2.00	0.50	3.12	黒曜石
10	6月2日	H7	I	石器	石鏡			1	4.20	1.50	0.60	2.78	黒曜石
11	6月30日	G6	III	石器	石鏡		被熱	1	3.60	1.20	0.40	1.19	黒曜石
12	6月1日	H6	I	石器	石鏡			1	(3.30)	2.20	0.60	3.49	黒曜石
13	5月17日	※	※	石器	石鏡片		接合	1	6.60	3.60	0.60	9.08	黒曜石
14	6月10日	※	I	石器	石鏡片		接合花子跡	1	6.40	3.50	1.00	16.87	黒曜石
15	6月2日	H7	I	石器	石鏡片			1	(6.10)	2.90	0.90	9.57	黒曜石
16	6月2日	H7	I	石器	石鏡片		接合	1	5.50	2.70	0.70	8.23	黒曜石
17	6月2日	H7	II	石器	石鏡片			1	5.20	2.60	0.70	6.30	黒曜石
18	5月17日	※	I	石器	石鏡片			1	(5.00)	2.80	0.70	7.85	黒曜石
19	6月2日	H7	I	石器	石鏡片			1	(4.90)	3.40	0.90	12.75	黒曜石
20	6月29日	※	II	石器	石鏡片			1	(4.00)	2.60	0.60	4.49	黒曜石
21	6月13日	※	I	石器	石鏡片			1	(3.60)	2.50	0.60	3.86	黒曜石
22	6月2日	H7	I	石器	スクレイパー			1	4.60	3.40	1.00	11.87	黒曜石
23	6月2日	H7	I	石器	スクレイパー			1	5.10	3.30	1.10	10.77	黒曜石
24	6月2日	H7	I	石器	石鏡片		転用スクレイパー	1	(7.60)	3.90	1.00	25.49	黒曜石
25	5月16日	H7	I	石器	骨札や骨			1	9.70	3.90	1.40	91.35	ロビン岩
26	5月17日	H7	I	石器	石厚原石		石さ片転用たたき石	1	8.70	4.70	3.50	199.80	緑色頁岩
27	6月8日	H6	IV	石器	すり石		I	(8.40)	(9.10)	(6.10)	532.50	砂岩	
	6月15日	※	II	石器	すり石								
	6月16日	※	II	石器	すり石								
	6月24日	※	III	石器	すり石								
28	5月18日	※	I	石器	たたき石		1	7.80	10.00	3.80	441.20	砂岩	
29	5月18日	※	I	石器	たたき石		1	11.50	11.10	5.20	906.00	安山岩	
30	6月15日	※	I	石器	打石		1	17.60	14.60	7.10	1950.00	砂岩	
31	6月24日	※	I	石器	スクレイパー		1	5.30	3.20	0.90	7.54	黒曜石	

樽田・安濃コレクション掲載石器														
遺物番号	実測番号	図版番号	日付	調査区・遺構	層位	種別	分類	点数	備考	長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材
1	37	樽田4	7月7日	樽田庭前	表採	石器	石鏡	1		3.70	1.80	0.60	2.46	黒曜石
3	38	樽田5	7月7日	樽田庭前	表採	石器	石鏡片	1		(1.90)	1.60	0.40	0.80	黒曜石
4	36	樽田6	7月7日	樽田庭前	表採	石器	石鏡	1		6.50	2.70	0.80	9.49	黒曜石
5	35	樽田7	7月7日	樽田庭前	表採	石器	石鏡片	1	欠損	(4.00)	3.10	0.70	6.97	黒曜石
6	39	樽田8	7月7日	樽田庭前	表採	石器	スクレイパー	1	欠損	(8.70)	4.60	1.10	36.07	黒曜石
7	40	樽田9	7月7日	樽田庭前	表採	石器	スクレイパー	1	欠損	(4.40)	3.90	1.40	19.19	黒曜石
13	25	安濃7	7月7日	安濃庭前	表採	石器	骨玉環器	1		7.80	2.50	0.80	13.85	黒曜石
3	29	安濃8	9月7日	安濃庭前	表採	石器	石鏡	1		2.20	1.30	0.30	0.56	黒曜石
6	28	安濃9	9月7日	安濃庭前	表採	石器	石鏡	1		4.70	1.70	0.60	3.18	黒曜石
2	26	安濃10	9月7日	安濃庭前	表採	石器	石鏡	1		(6.00)	3.60	0.90	14.53	黒曜石
4	27	安濃11	9月7日	安濃庭前	表採	石器	石鏡	1		5.20	3.90	0.70	7.67	黒曜石
1	31	安濃12	9月7日	安濃庭前	表採	石器	石鏡	1		(8.10)	3.90	1.90	55.55	黒曜石
9	30	安濃13	9月7日	安濃庭前	表採	石器	すり石	1		4.30	4.00	0.70	9.07	黒曜石
11	33	安濃14	9月7日	安濃庭前	表採	石器	すり石	1		(11.50)	6.10	2.10	329.70	緑色片岩
10	34	安濃15	9月7日	安濃庭前	表採	石器	すり石	1		(11.60)	5.10	2.20	222.20	緑色片岩
12	32	安濃16	9月7日	安濃庭前	表採	石器	すり石	1	素材	20.70	9.90	4.50	1201.00	緑色片岩



圖V-1 出土土器・石器





図V-2 出土石器

## VI章 自然科学的手法による分析結果

### 1. 屈足17遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

#### 1 測定対象試料

屈足17遺跡は、北海道上川郡新得町字屈足784-6（北緯43° 7' 59.2537"、東経142° 55' 41.3116"）に所在する。中期更新世以降に形成された美蔓台地（第1段丘面）に立地し、十勝川に面する。測定対象試料は、遺物包含層から出土した木片3点である（表1）。

試料はⅢ-1層、Ⅲ-4層、V層から出土し、Ⅱ層からは火山灰が検出されている。試料No.1の周辺で木の根が確認されている。

#### 2 測定の意義

遺跡内に位置する複数の湧水跡の年代関係及び狩猟場としての継続期間を明らかにする。

#### 3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

#### 4 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度（<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C）、<sup>14</sup>C濃度（<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

#### 5 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度（<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) <sup>14</sup>C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。<sup>14</sup>C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。

ある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2、3に示した。 $^{14}\text{C}$ 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$ 年代の誤差( $\pm 1\sigma$ )は、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度の割合である。pMCが小さい( $^{14}\text{C}$ が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上( $^{14}\text{C}$ の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2、3に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}\text{C}$ 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差( $1\sigma = 68.2\%$ )あるいは2標準偏差( $2\sigma = 95.4\%$ )で表示される。グラフの縦軸が $^{14}\text{C}$ 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv42較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2、3、図版1、2に示した。なお、暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BP」または「cal BC/AD」という単位で表され、ここでは前者を表2、図版1に、後者を表3、図版2に示した。

## 6 測定結果

測定結果を表1~3、図版1、2に示す。較正年代は、cal BPとcal BC/ADの2通りで算出したが、以下の説明では、試料No.1をcal BC/ADの値(表3、図版2)、試料2、3をcal BPの値(表2、図版1)で記述する。

試料No.1の $^{14}\text{C}$ 年代は $1330 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代( $1\sigma$ )は $657\sim 760\text{cal AD}$ の間に2つの範囲で示される。縄文文化期前期から中期頃に相当(臼杵編2007)する。

他の試料2点の $^{14}\text{C}$ 年代は、No.2が $6780 \pm 30\text{yrBP}$ 、No.3が $12210 \pm 40\text{yrBP}$ である。暦年較正年代( $1\sigma$ )は、No.2が $7657\sim 7596\text{cal BP}$ の範囲で縄文時代早期末葉頃(小林編2008)、No.3が $14163\sim 14032\text{cal BP}$ の範囲で後期旧石器時代の終末頃(本州では縄文時代草創期の隆線文期頃、工藤2012)に相当する。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

## 引用文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360  
 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション  
 工藤雄一郎 2012 旧石器・縄文時代の環境文化史 高精度放射性炭素年代と考古学, 新泉社  
 Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887  
 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, Radiocarbon 19(3), 355-363

白杵勲編 2007科学研究費補助金基盤研究(B)(2)北海道における古代から近世の遺跡の暦年代 研究成果報告書, 札幌学院大学人文学部

表VI-1-1 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-161423	No.1 (Ka17-1)	G7 包含層 III-1層	木片	AAA	-25.64±0.38	1,330±20	84.79±0.26
IAAA-161424	No.2 (Ka17-2)	C1 包含層 III-4層	木片	AAA	-26.23±0.32	6,780±30	43.02±0.17
IAAA-161425	No.3 (Ka17-3)	G7 包含層 V層	木片	AAA	-25.10±0.44	12,210±40	21.88±0.12

[#8248]

表VI-1-2 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代calBP)

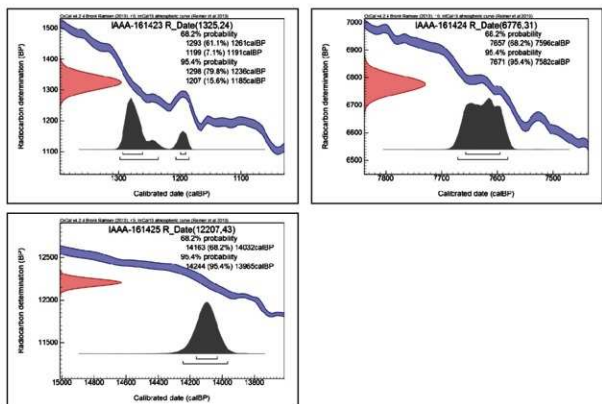
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-161423	1,340±20	84.68±0.25	1,325±24	1293calBP-1261calBP (61.1%) 1199calBP-1191calBP (7.1%)	1298calBP-1236calBP (79.8%) 1207calBP-1185calBP (15.6%)
IAAA-161424	6,800±30	42.91±0.17	6,776±31	7657calBP-7596calBP (68.2%)	7671calBP-7582calBP (95.4%)
IAAA-161425	12,210±40	21.87±0.12	12,207±43	14163calBP-14032calBP (68.2%)	14244calBP-13965calBP (95.4%)

[参考値]

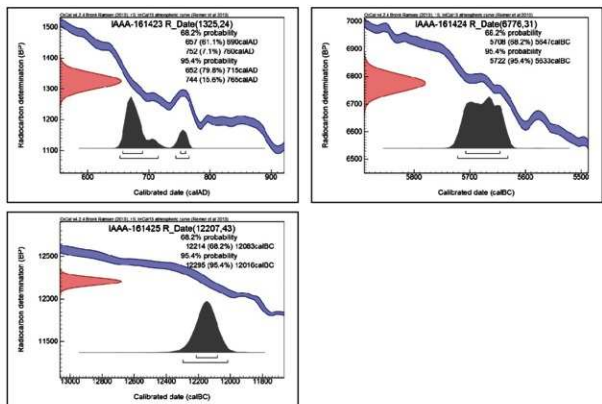
表VI-1-3 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代calBC/AD)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-161423	1,340±20	84.68±0.25	1,325±24	657calAD-690calAD (61.1%) 752calAD-760calAD (7.1%)	652calAD-715calAD (79.8%) 744calAD-765calAD (15.6%)
IAAA-161424	6,800±30	42.91±0.17	6,776±31	5708calBC-5647calBC (68.2%)	5722calBC-5633calBC (95.4%)
IAAA-161425	12,210±40	21.87±0.12	12,207±43	12214calBC-12083calBC (68.2%)	12295calBC-12016calBC (95.4%)

[参考値]



【図版1】 暦年較正年代グラフ (cal BP、参考)



【図版2】 暦年較正年代グラフ (cal BC/AD、参考)

## 2. 屈足17遺跡出土黒曜石製石器の産地推定

竹原弘展 (パレオ・ラボ)

## 1 はじめに

上川郡新得町屈足に所在する屈足17遺跡から出土した縄文時代の黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

## 2 試料と方法

分析対象は、黒曜石製フレイク20点である(表1 図版15)。時期は、I・II層が縄文時代後期～晩期、III層が縄文時代早期とみられている。試料は、測定前にメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000 $\mu$ A、試料室内雰囲気は真空中に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた(望月, 1999など)。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps: count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

- 1)  $Rb \text{ 比率} = Rb \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 2)  $Sr \text{ 比率} = Sr \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 3)  $Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$
- 4)  $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$

表V-2-1 分析対象となる黒曜石製石器一覧

試料番号	調査区・遺構	層位	重量(g)	種別
ku17-1	B4	I層	0.13	フレイク
ku17-2	C4	I層	0.42	フレイク
ku17-3	D3	I層	0.28	フレイク
ku17-4	E4	I層	0.66	フレイク
ku17-5	E7	I層	0.59	フレイク
ku17-6	F5	I層	3.03	フレイク
ku17-7	F6	III層	4.59	フレイク
ku17-8	F7	I層	0.45	フレイク
ku17-9	G4	I層	7.01	フレイク
ku17-10	G6	I層	1.31	フレイク
ku17-11	G7	I層	0.58	フレイク
ku17-12	H5	I層	0.99	フレイク
ku17-13	H5	III層	2.38	フレイク
ku17-14	H5	III層	0.64	フレイク
ku17-15	I5	I層	2.34	フレイク
ku17-16	I5	I層	1.72	フレイク
ku17-17	I5	II層	2.49	フレイク
ku17-18	J6	I層	3.02	フレイク
ku17-19	J8	I層	1.34	フレイク
ku17-20	K8	I層	0.74	フレイク

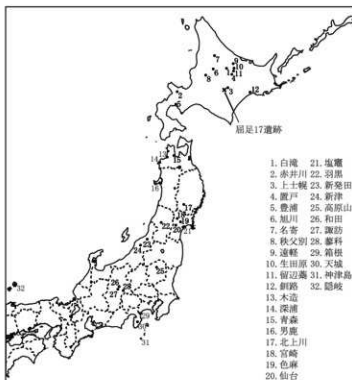


図1 黒曜石産地分布図(東日本)

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率-縦軸log(Fe強度/K強度)の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせて指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、log(Fe強度/K強度)の値が減少する(望月, 1999)。試料の測定面にはなるべく平滑な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を削って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表2に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、図1に各原石の採取地の分布図を示す。

### 3 分析結果

表3に石器の測定値および算出した指標値を、図2と図3に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んである。

分析の結果、13点が所山群(北海道、上土幌エリア)、6点が所山群(北海道、置戸エリア)の範囲にプロットされた。残り1点(kul7-15)は、合致する判別群がなく、産地不明であった。

なお、赤井川群(北海道、赤井川エリア)と上土幌群の判別図は、一部重複がある。そこで、今回上土幌群とみられた13点の石器および赤井川群と上土幌群の原石についてY分率(Y強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度))を算出し、Y分率とMn強度×100/Fe強度をプロットした判別図を作成した(図4)。図4より、13点いずれも赤井川群ではなく、上土幌群に属することを確認した。

表3に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。また、表4に層位別の産地推定結果を示す。Ⅲ層(縄文時代早期)出土石器はいずれも上土幌エリア産で、Ⅰ・Ⅱ層(縄文時代後期～晩期)出土石器になると上土幌エリア産に加え、置戸エリア産も含まれていた。

表VI-2-2 東日本黒曜石産地の+B1:F29判別群

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地	
北海道	白滝	白滝1	赤石山山頂(43)、八号沢遺跡(15)	
		白滝2	7の沢川支流(2)、八号沢(10)、十勝石炭露頭遺下河床(11)、アジサイの滝遺跡(10)	
	赤井川	赤井川	黒川+木田川(2)	
	上土幌	上土幌	十勝三鼓(4)、タウシュベツ川右岸(42)、タウシュベツ川左岸(10)、十三ノ沢(32)	
	釧路	釧路山(5)		
		所山	所山(5)	
		豊浦	豊浦(10)	
		旭川	旭川 流文台(9)、雨台(2)	
		名寄	名寄 忠烈赤川(19)	
		秩父別	秩父別1 中山(65)	
			秩父別2	
			秩父別3	
			滝野	滝野 柱名澤川河床(2)
			生田原	生田原 仁田布川河床(10)
	青森	留辺蘆	留辺蘆1	クサツツツ川河床(9)
		留辺蘆2		
網走		網走	網走市東スギ一場(9)、阿寒川右岸(2)、阿寒川左岸(6)	
本庄		本庄	出来島海岸(15)、越ヶ原(10)	
深浦		八森山	阿崎山(7)、八森山公園(8)	
青森		青森	天田内川(6)	
秋田		男里	金ヶ崎	金ヶ崎温泉(10)
			船本	船本海岸(4)
		北上川	北上新居1	北上川(9)、真城(33)
岩手			北上新居2	
		北上新居3		
		岩手		
宮城	宮崎	岩手	岩手(40)	
	色麻	根岸	根岸(40)	
	仙台	秋保1	土蔵(18)	
		秋保2		
山形	塩竈	塩竈	塩竈(10)	
	羽黒	月山	月山庄前(24)、大船沢(10)	
		柳引	たらのき代(19)	
新潟	新発田	坂山	坂山牧場(10)	
		新津	金津(7)	
栃木	高麗山	甘藷沢	甘藷沢(22)	
		七峰沢	七峰沢(2)、宮川(3)、枝神沢(3)	
		西新屋	芙蓉パーラー小土砂集積場(30)	
		嵐山	嵐山(14)、東新屋(54)	
		小深沢	小深沢(42)	
	和歌山	土屋橋1	土屋橋西(10)	
		土屋橋2	新和田トンネル北(20)、土屋橋北西(58)、土屋橋西(1)	
			古野	和田トンネル北(20)、古野(38)、和田峠スギ一場(20)
			ブドウ沢	ブドウ沢(30)
			数ヶ沢	数ヶ沢下(20)
		高松沢	高松沢(19)	
静岡県	豊田	星ヶ台	星ヶ台(35)、星ヶ塚(20)	
		河内	河内(20)、豊野(20)、豊野峠東(20)	
		芦ノ湯	芦ノ湯(20)	
静岡県	御坂	御坂	御坂(51)	
		殿吉屋	殿吉屋(20)	
静岡県	天城	上多賀	上多賀(20)	
		花神	花神(20)	
東京都	神津島	原島島	原島島(27)	
		砂糠崎	砂糠崎(20)	
島根県	隠岐	久見	久見パーラー中(6)、久見埋没現場(5)	
		真浦	真浦海岸(3)、加茂(4)、岸島(3)	

表Ⅱ-2-3 測定値および産地推定結果

試料 番号	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn*100 Fe	Sr分率	log Fe K	Y分率	判別群	エリア
ku17-1	165.7	47.2	1237.0	423.9	232.2	189.9	466.2	32.31	3.82	17.70	0.87		所山	置戸
ku17-2	252.2	77.6	1784.7	730.8	317.2	383.7	691.4	34.42	4.35	14.94	0.85	18.07	上土観	上土観
ku17-3	252.1	72.7	1899.6	714.1	392.9	321.3	801.7	32.02	3.83	17.62	0.88		所山	置戸
ku17-4	267.3	80.5	1952.8	771.2	430.0	364.9	907.3	31.18	4.12	17.39	0.86		所山	置戸
ku17-5	269.3	86.5	1928.8	772.6	336.3	403.7	724.8	34.53	4.48	15.03	0.86	18.04	上土観	上土観
ku17-6	261.2	84.6	1746.3	717.1	329.5	403.1	731.1	34.12	4.84	14.83	0.83	18.14	上土観	上土観
ku17-7	263.3	80.4	1703.4	745.0	321.2	397.5	712.8	34.23	4.72	14.76	0.81	18.26	上土観	上土観
ku17-8	254.8	81.3	1846.9	719.4	310.9	368.0	665.3	34.86	4.40	15.06	0.86	17.83	上土観	上土観
ku17-9	297.0	90.9	1934.1	784.7	298.2	407.8	672.3	36.28	4.70	13.79	0.81	18.85	上土観	上土観
ku17-10	289.1	87.0	2074.4	811.1	466.0	379.0	957.8	31.03	4.20	17.83	0.86		所山	置戸
ku17-11	212.9	66.3	1515.8	608.6	262.6	321.9	580.7	34.31	4.38	14.81	0.85	18.15	上土観	上土観
ku17-12	234.3	75.4	1647.0	688.0	297.3	364.2	656.8	34.29	4.58	14.82	0.85	18.15	上土観	上土観
ku17-13	265.3	86.7	1766.9	762.4	330.4	410.3	740.3	33.99	4.91	14.73	0.82	18.29	上土観	上土観
ku17-14	284.5	89.3	2058.0	790.4	340.4	403.1	725.6	34.98	4.34	15.07	0.86	17.84	上土観	上土観
ku17-15	244.8	78.8	2463.8	660.7	526.3	326.8	771.8	28.91	3.20	23.03	1.00		?	不明
ku17-16	259.1	77.4	1871.4	757.2	427.7	361.7	913.4	30.78	4.13	17.39	0.86		所山	置戸
ku17-17	279.0	89.5	1873.9	797.6	345.9	428.9	770.2	34.05	4.77	14.77	0.83	18.31	上土観	上土観
ku17-18	296.7	88.7	1914.7	851.8	368.4	444.2	819.6	34.29	4.63	14.83	0.81	17.88	上土観	上土観
ku17-19	282.1	84.3	1761.0	775.5	294.3	412.9	688.9	35.71	4.79	13.55	0.80	19.01	上土観	上土観
ku17-20	245.9	72.7	1818.4	712.4	396.2	334.7	835.0	31.27	4.00	17.39	0.87		所山	置戸

表Ⅱ-2-4 層別別の産地

層位	時期	上土観	置戸	不明	計
I	縄文後期 ～晩期	9	6	1	16
II		1			1
III	縄文早期	3			3
	計	13	6	1	20

## 4 おわりに

屈足17遺跡より出土した黒曜石製石器20点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、1点は産地不明であったものの、13点が上土観エリア、6点が置戸エリア産と推定された。

## 引用文献

望月明彦(1999) 上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定. 大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2-上和田城山遺跡篇-」: 172-179. 大和市教育委員会.

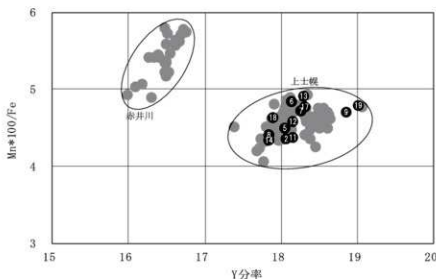


図4 黒曜石産地推定判別図(3)



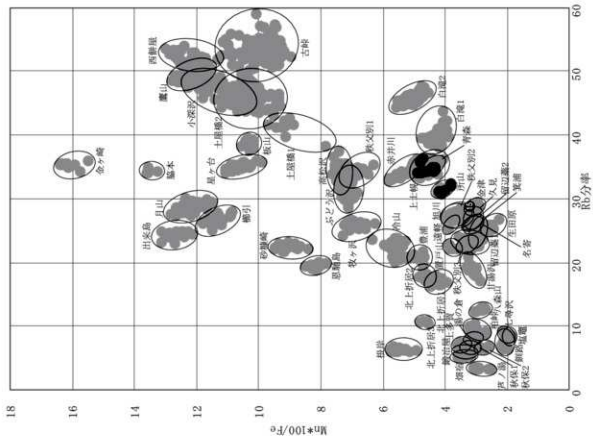


図2 黒曜石産地推定判別図(1)

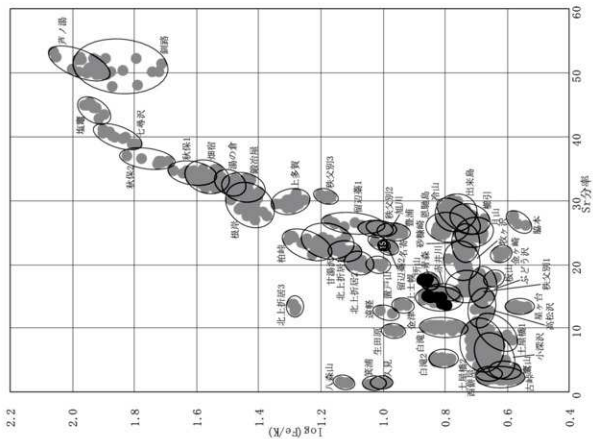


図3 黒曜石産地推定判別図(2)

## Ⅷ章 総括

### 1. 屈足17遺跡で想定される人類活動

今回の調査は、遺物は少なかったが、各種自然の作用が残した痕跡も検出することができた。そして、発掘調査で得られた情報を、既存の知識と総合化することで、これまで想定されていなかった縄文時代のシカ猟の実態に迫ることができたと考えている。

#### ・縄文時代後期前葉の石槍痕

沢頭に隣接して、縄文文化後期前葉の石器ブロックが確認された。石器ブロックは、石槍とその調整剥片に特化した組成であった。また、折損した石槍も多く含まれたため、使用前後の石槍の鋭利さの調整によって折損したか、狩りにより折れた石槍の交換を行った痕跡と考えられる。なお、スクレイパーやノッチが少ないことから、柄などの加工はほぼなされなかったとみられる。

石器ブロックは、沢頭に隣接することから、その地点に集まるか、通過する動物を対象とした、待ち伏せ猟がなされたものと推測される。また、狩猟具が槍に特化していることから、待ち伏せ猟の対象は中型獣であったであろう。なかでも、シカが想定される。遺物点数は4万点を越えたことから、石器ブロックは、一回性のものというより、回帰的な行動によって残されたものと考えられる。一回の滞留期間はごく短かったであろうから、ある程度固定的な狩小屋の存在も想定される。

#### ・縄文時代前半期のヌタ場でシカ猟

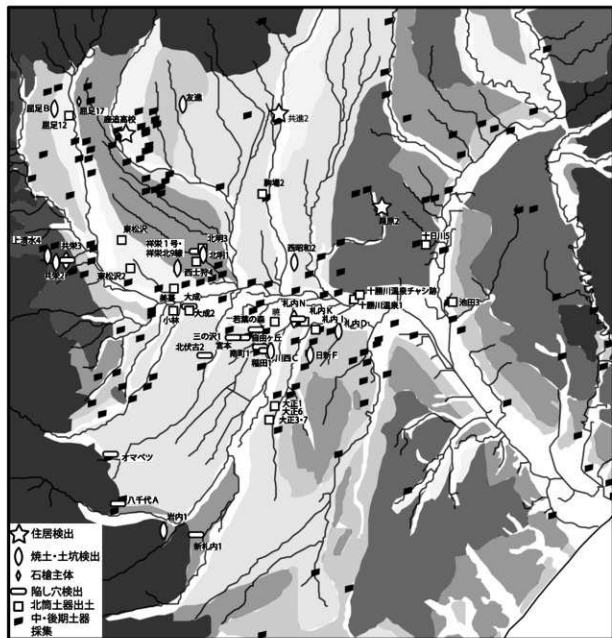
沢頭に隣接して、検出されたシカの足跡覆土から黒曜石製チップが検出された。シカの足跡は漸移層～ローム層に2cmほど食い込むことで確認されたが、足跡の覆土は黒色土であった。したがって、黒色土堆積時に、シカは足跡を残したことになる。その層準は、黒色土下部Ⅲ-3②～4層に当たる。より下位の漸移層から晩式土器が出土し、より上位の黒色土上部Ⅲ-2層から北筒式土器が出土したことから、黒色土下部は、縄文時代前半期（早・前期）に堆積したものと考えられる。

シカの足跡が下位層に食い込んだということは、当時の表土以下の黒色土・漸移層・ローム層が、水分を含み全体に泥濘化していたとみられる。また、足跡と同層準とみられる黒土層は、漸移層やロームのフレイク状ブロックを含んでおり、攪乱的な状況を示した。さらに、沢頭に隣接して湧水痕も確認された。このことから、この地点はヌタ場と呼ばれる浅い泥沼であったと推察される。

以上の状況を総合化すると、ヌタ場に集まったシカを狩っていた状況が考えられる。シカがヌタ場に集まるのは、泥浴びをするため、好む時期は、秋の繁殖期とされる。ヌタ場で、角を研いだり、自分の尿を含む泥を全身に帯びたりすることで、繁殖に備えるという。また、この時期は繁殖による興奮で、シカの注意力も減退するらしい。つまり、待ち伏せして猟をするには、ヌタ場はかなり好条件な狩場であったと考えられる。このような想定・解釈が妥当であるならば、この地点を利用した狩猟時期が特定できるだけでなく、これまで注意されなかった縄文時代のシカ猟の実態の一つに迫れたことになる。

#### ・縄文時代早期の利用状況

晩式期と、大槲毛式期に利用がなされたとみられるが、遺物量が少なく利用実態を推定しえない。水場への立ち寄り程度の可能性が考えられる。



図VI-1 北簡式期の十勝地域の遺跡分布

## 2. 石器組成・動植物遺存体からみた縄文時代十勝地域の生業

### ・北簡式期（縄文時代中期後葉～後期前葉）の石器組成と遺跡類型

北簡式期の十勝地域では、ほかにも石楯が突出して多い組成を示す遺跡が確認された。それは、芽室町北明1遺跡（北埋調報76）、音更町友進遺跡（北埋調報6）、音更町西昭和2遺跡（北埋調報82）で、定形石器の中での石楯率が7割を超えた。しかし、屈足17遺跡と異なり、いずれの遺跡もスクレイパーの比率がやや大きかった。また、焼土が確認され、石核・砥石も含まれた。この場合、猟小屋を設けた狩猟拠点のような性格だったのかもしれない。そこは、各種狩猟具の調整・準備や、獲物の各種加工をする場所であったと推測される。また石鏃も多いことから多様な猟対象へ対応可能な作業がなされたと考えられる。

北簡式期の遺跡の石器組成は、住居が検出される集落の場合（鹿追高校遺跡（鹿追町教委2002）・共進2遺跡（音更町教委2007）など）は、スクレイパー・Rフレイク・石楯を主体とするものであ



た。銅路・根室地域の集落遺跡（根室市穂香川右岸遺跡（北埋調報212）・大楽毛1遺跡（銅路市埋文2001）など）ではこれに砥石が追加される。

また、盛土遺構・捨て場の場合（銅路町天塚1遺跡（北埋調報254）・駒場遺跡（音更町教委1984）は、石楯・石楯・スクレイパーを主体とするものとなる。さらに、石材原産地に近接した遺跡（遠軽町金山6遺跡（北埋調報315））では、石楯を主体とするものの、両面調整石器・スクレイパー・Rフレイクも多く、狩場と集落の中間組成を示している。このように、北筒式期の石器組成は、遺存した状況によって遺跡類型に区分可能であると理解される。

そして、北筒式期の石器組成と、その前後の時期や、同時期の北海道西部の石器組成を比較すると、すり石・敲き石の比率が極端に少ないことが分かる。これは単純に解釈すると、堅果類や根茎類といった植物性食料の利用が低調であったことを示すとみられる。

また、根室地域のように堅穴住居の構築が重複しながら繰り返される集落は、十勝地域では知られていない。これは、水産物や植物生産物に代表される回帰的資源を利用しない生計戦略を選択していたと考えられる。つまり、堅果類やサケ類の利用が重要でなかった可能性がある。

なお澤（1987）は、この時期、シカ猟の重要性が増したことを述べている。その根拠は、石楯や大型石楯の多出、堅果類の調理・加工道具の減少、山地や「内陸奥地」の遺跡の存在、遺跡の立地などが挙げられる。

#### ・十勝地域の生業環境

植生を示すものとして、居辺16遺跡（上土幌町教委1985・中期北筒Ⅱ式期）・猿別C遺跡（帯別町教委1983・中期モコト式期）・宮本遺跡（帯広市教委1986・中期末～後期前葉）・葎原2遺跡（音更町教委1987・後期北筒Ⅳ式期・晩期幣舞式期）・相生遺跡（音更町教委1986・晩期～続縄文緑ヶ岡式）の花粉分析結果がある。早期では、ハンノキ・シラカンバ・ヤナギ・ドロノキ・カシワ・ミズナラ・ハルニレ・カエデといった落葉広葉樹のほか、トドマツ・エゾマツ・アカエゾマツといった針葉樹が伴う。それが中・後期では、丘陵部にはミズナラ・カシワ・イタヤカエデ・シナノキ・シラカンバ・キハダ・コブシ・ホオノキ、斜面にはハルニレ・ケヤマハンノキ・ハリギリ・オニグルミ、低地にはハンノキ・ヤチダモ・ヤナギ・ドロノキなどの二次林を含む落葉広葉樹が生育していたことが推測されている。さらに晩期では、針葉樹のトドマツ・エゾマツ・アカエゾマツ、落葉広葉樹のミズナラ・カシワ・ハルニレ・オヒョウニレ・ハンノキ・ケヤマハンノキ・シラカンバ・ウダイカンバ・オニグルミ・コブシ・ホオノキ・シナノキ・オオバボダイジュ・イタヤカエデ・ハウチワカエデ・ヤマモミジ等によって二次林を含む針広混交林が分布していたと推定される。

利用樹種を列挙する。共栄3遺跡（北埋調報76・早期）：コナラ属コナラ節・トネリコ属。八千代A遺跡（帯広市教委1990・早期）：トネリコ属を主に、ニレ属・コナラ属・ハンノキ属・ニレ属・トウヒ属・カエデ属？・オニグルミ？。小林遺跡（芽室町教委2000・前期）：コナラ属のみ。居辺14遺跡（上土幌町教委1985・中期）：コナラ属を主とし、ほかにトウヒ属・ヤナギ科・イヌエンジュ属・カエデ属・ハシドイ属・ニワトコ属。

後期前葉の例を周辺地域に見ると、銅路地域では、ヤナギ属・ハンノキ属ハンノキ亜属・コナラ属コナラ節（ミズナラ等）・トネリコ属（ヤチダモ等）がみられる（銅路町天塚1遺跡・銅路市大楽毛1遺跡）。根室地域ではコナラ属コナラ節・クルミ属・トネリコ属・ハンノキ属・ヤナギ属・カバノキ属・シナノキ属・ニレ属・カエデ属がみられる（根室市穂香堅穴群（北埋調報184））。クリ主体の北海道西部（北斗市押上1遺跡（北埋調報312））とは、利用状況が異なる。

利用された植物種実を列挙する。八千代A遺跡（早期）：ミズナラとみられるコナラ亜属子葉・キ

ハダ果実。高木1遺跡(北海道開拓記念館1989・早期):コナラ亜属子葉・オニグルミ内果皮。小林遺跡(前期):クルミ属殻果片。十日川5遺跡(中期・モコト式期(北理調報82)):多量のクルミ属殻果片・ブドウ属種子1点。つまり、堅果利用はミズナラとクルミに限られたことが推定される。参考に釧路地域(釧路町天寧1遺跡)の植物種実利用状況を示す。晩期:オニグルミ主。キハダ・ガンコウラン・ニワトコ属・マタビ・コナラ亜属・ブドウ科・アサ・ヒシ。

このように、十勝地域の植物利用は、早期はコナラ属が利用されたが、前期以降はオニグルミ主体になっていったとみられる。ただし、石器組成におけるすり石の出現率は、前期後半~中期前半までは多いことから、その時期までは堅果の利用があったと推定される。利用樹種では、後期前葉段階でもコナラ属がみられるが、堅果の利用が低調となるのは、その生産量に変動が起きた可能性が考えられる。つまり、コナラ属堅果の凶作が続いたことで、利用対象外になっていったと考えられる。

動物利用状況を示すものとしては、西土狩4遺跡(芽室町教委2000・前期宮本式期)・相生1遺跡(音更町教委1986・晩期緑ヶ岡式)の出土動物遺存体がある。西土狩4遺跡では、魚類はウグイ類を主に、チョウザメもみられ、サケ類・イトウはごく少なかった。哺乳類ではシカが多く含まれた。ほかにヒグマ、ユキウサギ、テン以上タヌキ以下大の小型獣、鳥類も確認されている。ウグイ類は大形のマルタとされ、十勝川河口が今よりも大分内陸であったと推定されている。相生1遺跡(晩期緑ヶ岡式)では、サケ類は1点のみで、鳥類ではワシ類が確認された。獣骨は大部分がシカのもので、一部イノシシも含まれた。

釧路地域(釧路町天寧1遺跡)の魚類利用状況を示す。前期:カレイ類・ニシンが多く、キュウリウオ・ボラ類・カジカ類が次ぐ。後期前葉:キュウリウオが多く、カレイ類・ニシン・ウグイ類が次ぐ。晩期:イトヨが多く、カレイ類・ウグイ・ヒラメ・キュウリウオ・スズキ・イトウが次ぐ。いずれもシロサケに代表されるサケ類はごく少なかった。

このように、十勝地域で利用された動物は、エゾシカを主体に、ウグイ類やチョウザメを従としたとみられる。イトウ・ワシ類・ユキウサギ・エゾヒグマなどは僅かな利用に留まったと考えられる。サケ類は、海水温の影響で縄文時代後期までは資源量が少なかった可能性がある。

以上の結果からも、縄文時代中期後半以降晩期までの十勝地域において、エゾシカが食料資源として極めて重要な地位を占めたことが再確認される。

#### ・縄文時代のシカ猟

これまで縄文時代のシカ猟は、道具として弓矢や槍が利用され、イヌも併用され、さらには陥し穴が用いられたことが想定されてきた(大泰司1983)。

弓矢の場合、忍び射ち、誘き出し射ちが想定される。それには、鹿笛、矢毒、仕掛け弓が用いられた可能性もある(大泰司1983)。鹿笛は、函館市恵山貝塚(統縄文時代前半期)や長崎県対馬市佐賀貝塚(縄文時代後期)から出土した骨角製品が知られているが、民具の多くが木製であることを考えると、これらも木製品を模倣したものともみることができる。つまり、広く普及していた可能性がある。民族例をみると、鹿笛を用いる時期は秋の発情期であり、雌ジカの声をまねて雄ジカを呼び寄せる。また春には別な笛で小鹿をまねて雌ジカを引き寄せたという。また、冬季であれば、雪上に残る足跡追跡が可能であったとみられる。なお、スタ場でのシカ猟は、忍び射ちの一種と考えられる。

罾猟の場合、陥し穴のほか、くくり罾やね罾の存在も想定される(大泰司1983)。陥し穴と推定されるTピットは、シカ猟を示す遺構として、多く検出され、検討が加えられている(森田・遠藤1984、西脇1991、大泰司2007、藤原2013など)。北海道では、中期後半~後期初頭の限定された時期に用いられたと考えられており(藤原2013)、つまりほぼ北箭式期に特徴的な狩猟法とみられることでも

きる。しかしながら、幅広い時期での使用も確認されており、時期が限定的かは定かではない。十勝地域では、帯広市域～茅室市域を中心に、中札内村・清水町・幕別町で検出されている。これは十勝平野南西部、地形的には十勝川中流域の段丘上と、十勝川支流と日高山脈山麓の変換点にあたる。

大量捕獲猟としては、水上捕獲、崖落とし、柵内への追い込みが想定される(大泰司1983)。そのうち、追い込み用の鹿柵(大泰司1997)は、その可能性ある遺構が千歳市キウス5遺跡(縄文時代中期後半～晩期)から検出されている。なお、鹿追町の町名の元となった地名とされるクテクウシは、クテキウシで、「鹿柵のあるところ」というのが実際の意味と考えられる。また、松浦武四郎も十勝地域の鹿柵を記録しており(秋葉1997)、渡辺仁の調査でも屈足周辺で鹿柵が行われたことが記録されている(渡辺1972)。つまり遺跡周辺で十分実施可能な猟法であったと考えられる。

ちなみに、屈足のガンケに残る伝説からは、この地がシカの崖落とし地点であった可能性も残る。その伝説の一節に、ガンケに住む怪鳥は食べ残した骨をウェンシリの窪みに投げ散らかしていた、という部分があり(新得町史編さん専門委員会1972)、あるいは骨が集中した地点が実際にあったのかもしれない。なお、地主の袴田氏の話でも、入植時、山林に火を入れたところ、シカの角が一面にあったと聞かされた。したがって、単に、シカが多い土地であったということも知れない。

シカの狩猟時期については、遺存体における歯の萌出段階から推定される(新美1997)。入江貝塚(洞爺湖町・縄文後期前葉)出土シカ遺存体の分析では、4～11月の捕獲、8～12月の捕獲と推定されるものが多かった。また別に、その空白を埋める個体もあり、結果的に周年の捕獲が想定された。しかし、シカの生態も考慮して、8～12月に集中的に捕獲された可能性が指摘された(三谷2010)。

また、狩猟後は、頭蓋骨や四肢骨に関連する有用部位のみ遺跡に持ち帰られ、屠後は徹底的に破砕・利用された様子が復元された。そして、集落と狩猟地の間に狩猟キャンプが設けられた可能性が指摘された(三谷2010)。

動物遺存体のあり方から復元された生業戦略(三谷2010)は、石器組成と遺構の存在から推定した十勝地域の北筒式期の遺跡類型のあり方と類似するとみられた。つまり、住居が検出され、石槍・スクレイパー・Rフレイクが石器組成の主要素となる集落遺跡(共連2・鹿追高校・葭原2・岩内1?)、焼土のみ検出され、石槍を主、スクレイパーを従とする石器組成の狩猟拠点遺跡(北明1・友進・西昭和2)、石槍を主とする狩場遺跡(屈足17)の三種の類型が想定された。しかし、集落遺跡での住居跡数や遺物量が内浦湾とは異なり、明らかに少ないことから、十勝地域の集落遺跡の居住期間は長期間ではなかったとみられる。また、地域内を利用する集団規模も小さかったものと考えられる。この点、銅路地域や根室地域とも大きく異なる。詳細については、今後の課題としたい。

なお、今回の調査結果のうち、スタ場でシカ猟は、その生態や民族例からすると、当然想定されるものではあるが、遺跡調査で検出した明確な複数の状況痕跡から推定しえたことは、僥倖であった。

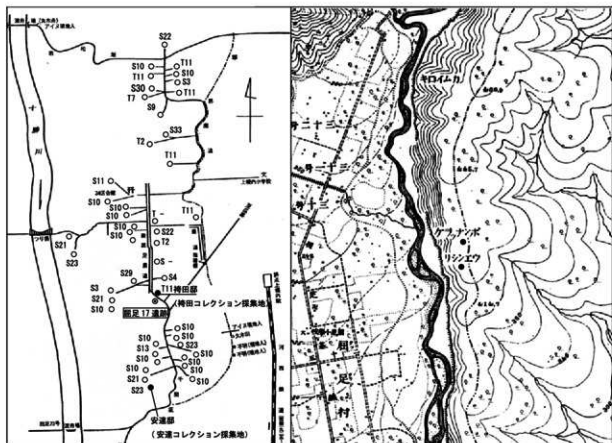
(福井)

### 3. 地域史

#### (1) 新屈足地区の歴史(図Ⅶ-4～6 図版14・15)

ここでは、新屈足の地域史として袴田幸男氏、安達廣・安達隆幸両氏より寄贈して頂いた新屈足地区表採遺物のコレクションについて紹介する。新屈足地区が開拓により開けていく様子は、袴田幸男氏が『新得町百年史』の中で、新屈足地区の各戸の入植時期を詳細に調査されているのでこれを利用した(図Ⅶ-4)。

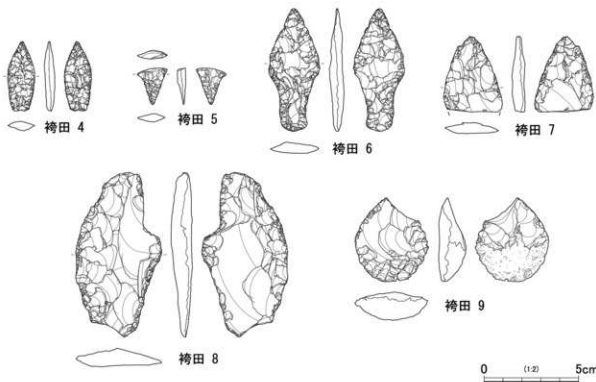
袴田氏は大正11年に入植した。袴田コレクションは袴田邸前の道路工事の際に発見したものを娘さんが保管していたものである。安達隆幸氏の父・廣氏は昭和23年に入植しており、安達コレクショ



図Ⅵ-2 新屈足入植図

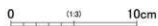
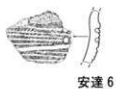
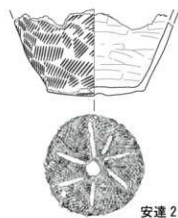
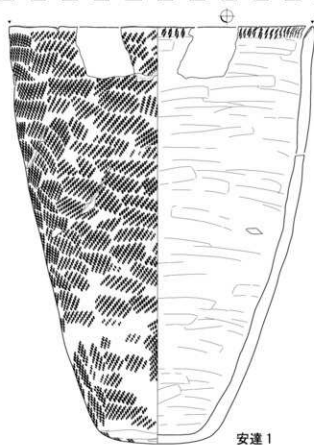
図Ⅵ-3 地域図

「新屈足移住者見取り図」袴田幸男氏作成「新得町百年史」1999と、明治44（1911）年「新得町」5万分の1陸地測量部より引用作成

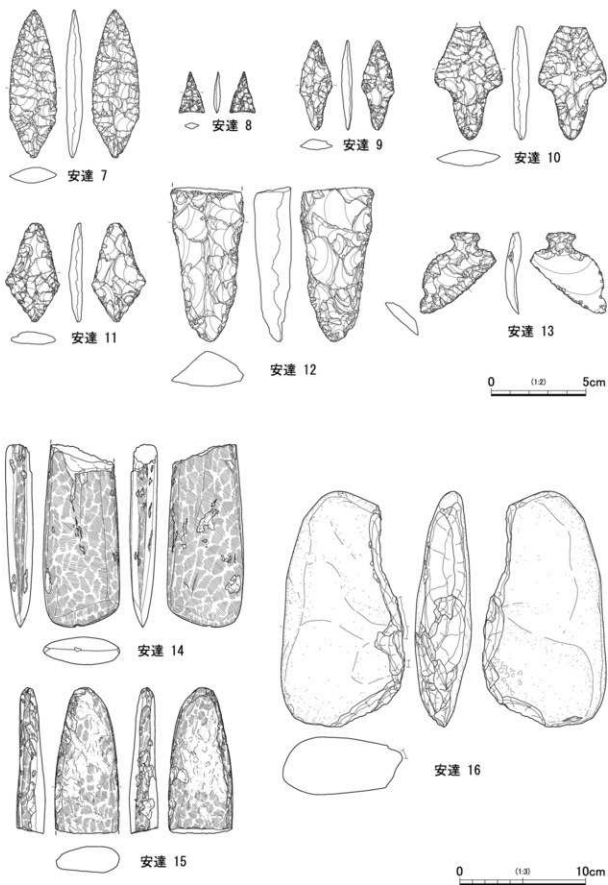


図Ⅵ-4 袴田コレクション

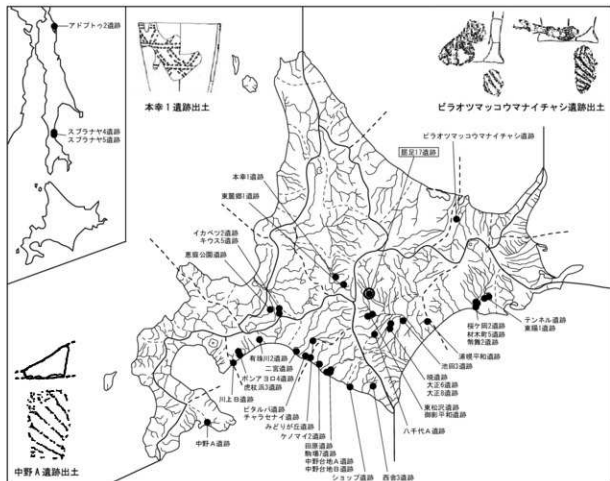




図Ⅶ-5 袴田・安達コレクション

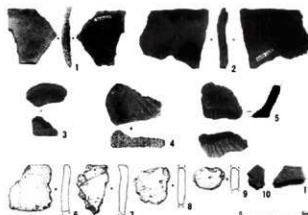


図Ⅵ-6 安達コレクション

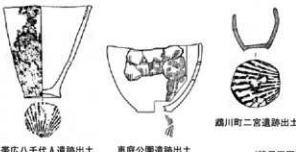


表Ⅶ-2 テンネル・晩式土器出土遺跡一覧

番号	地域	市町村名	遺跡名	発掘年	調査団体
1	遠軽市	中野4遺跡	1977	新得市教育委員会	
2	香取市	川上3遺跡	1986	北海道埋蔵文化財センター	
3	白老町	カノマイ2遺跡	1989	白老町教育委員会	
4	白老町	虎杖3遺跡	1989	北海道埋蔵文化財センター	
5	遠軽市	有珠川2遺跡	1978	北海道教育委員会	
6	千歳市	牛ウス5遺跡	1995	北海道埋蔵文化財センター	
7	千歳市	イカベツ遺跡	2015年	北海道埋蔵文化財センター	
8	東室蘭市	東置標1遺跡	2004	東室蘭市教育委員会	
9	中富町	本幸1遺跡	1987	中富町教育委員会	
10	富良野市	東置標1遺跡	1987	富良野市教育委員会	
11	鹿田町	二宮遺跡	1981	アイヌモシ	
12	紋別町	ビタル4遺跡	2002	紋別町教育委員会	
13	白老町	チャフセウ1遺跡	2010	白老町教育委員会	
14	白老町	カノマイ2遺跡	2015	白老町教育委員会	
15	早稲町	みどりが丘遺跡	1987	早稲町教育委員会	
16	駒ひだか町	駒場1遺跡	1982	駒ひだか町教育委員会	
17	駒ひだか町	中野台地の遺跡	1985	駒ひだか町教育委員会	
18	駒ひだか町	中野台地A遺跡	1985	駒ひだか町教育委員会	
19	駒ひだか町	ショップ遺跡	1989	紋別町教育委員会	
20	紋別町	扇原遺跡	1984	紋別町教育委員会	
21	新得町	扇原1遺跡	2016	北海道埋蔵文化財センター	
22	清水町	駒形早期遺跡	2012	清水町教育委員会	
23	清水町	東松江遺跡	1988	清水町教育委員会	
24	鹿田町	増田遺跡	1984	鹿田町教育委員会	
25	遠軽市	大正8遺跡	2005	遠軽市教育委員会	
26	駒形市	大正6遺跡	2005	駒形市教育委員会	
27	駒形市	大正4遺跡	1990	駒形市教育委員会	
28	駒形市	増田遺跡	1985	十勝考古学研究会	
29	遠軽町	遠軽早期遺跡	1971	遠軽町教育委員会	
30	駒形市	種ヶ岡7遺跡	1988	駒形市埋蔵文化財センター	
31	駒形市	材木町1遺跡	1980	駒形市埋蔵文化財センター	
32	駒形市	無影遺跡	2005	駒形市埋蔵文化財センター	
33	駒形市	無影遺跡	2006	北海道埋蔵文化財センター	
34	駒形市	テンネル遺跡(1地点)	1984	駒形考古学研究会	
35	島根県	シブヤツツマコウマナイヤシ遺跡	1984	島根町教育委員会	
36	サハリン	スブラナヤ4遺跡	2015	東京大学大学院	
37	サハリン	アドブツ2遺跡	2016	東京大学大学院	



サハリン島の前期新石器土器  
1～4: スブラナヤ5遺跡、5・6: アドブツ2遺跡、7～11: スブラナヤ4遺跡  
「日本列島北辺域における新石器」内田 2015 27引用



図Ⅶ-7 早期テンネル・晩式出土遺跡分布

ンは畑地耕作の際に発見した遺物を保管したものである。この遺物は帯広の明石博志氏が実見した記録がある。明治44年の『新得』地図では袴田邸はボンナラケ、安達邸はウエンシリ周辺に相当する。ボンナラケとはアイヌ語でボン（小さい）ナラ（低い方へならず）ケ（削る）で「小川の開析する処」という意味だろう。ウエンシリは「悪い（険しい）処」という意味である。

#### 袴田コレクション（ボンナラケ周辺の採集遺物 図Ⅶ-4・5 図版14・15）

**土器**（土器はすべて破片で口縁部片1点、胴部片125点、計126点）

1～3はV群c類土器。1は口縁部片。口唇部内方に斜位の縄文圧痕が施される。2・3は胴部片。共に垂下する貼付け瘤が施される。瘤に沿って縄の圧痕が施される。

**石器**（石器は石鏃1点、石槍・石槍片4点、スクレイパー2点、フレイクチップ119点、計126点）

**石鏃**

4～5は石鏃。4は柳葉形を呈する。5は尖頭部が欠損する有茎のもの。

**石槍**

6～7は石槍。6は基部が明確に作出され、茎部の翼状の返しが明瞭に作出される。7は基部が欠損する。

**スクレイパー**

8は端部が破損するが、ナイフ形を呈する両面調整石器で、両側縁は細かく加工される。9は端部が破損している。基部に摩耗した礫表皮がみられ、刃部は側縁を片側から細かく調整する。

#### 安達コレクション（ウエンシリ周辺の採集遺物 図Ⅶ-4～6 図版14）

**土器**（土器は復元個体1個、破片は口縁部片10点、胴部片41点、底部1点、計53点）

1はV群c類相当の復元個体で、口径24.5cm、器高34cmである。底部形状は丸底気味。口唇部内面に縦位に縄圧痕の刻目が施される。2は底部片。外面中央に窪みが設けられ、それを中心に7本の沈線文が放射状に施される。底部形状は外縁に屈曲部が設けられるが丸底気味。3・4は文様の施された口縁部片。3は多重沈線文が横環し下位に鋸歯状の沈線文が施される。4は多重沈線文。口唇部内面に縄の圧痕が施される。5・6は胴部片。刺突文が縦位に二か所施される。沈線文が菱形を描くように配されていると推測される。頸部は無文ナデ調整。

**石器**（石器は、石鏃2点、石槍・石槍片5点、つまみ付きナイフ2点、石斧・石斧片3点、計13点）

**有舌尖頭器**（旧石器は有舌尖頭器1点）

7は旧石器時代の尖頭器である。出土地点は帯広市内。庭の土入れ（帯広西方の土壌を移入したと）いうことである）の際に発見された。両面から入念に調整される、尖頭部側縁は外方に張る。

**石鏃**

8・9は石鏃である。8は三角形を呈する無茎の石鏃。9は有茎のもの。尖頭部側縁がやや外方に張る。

**石槍**

10・11は石槍。10は端部が欠損する。茎部に翼状の返しが作出される。11は尖頭部側縁がやや内湾する。12は尖頭部が欠損する。石槍の未成品だろう。

**つまみ付きナイフ**

13は片面縁調整を施す斜め形を呈する剥片のつまみ付きナイフ。剥片の一端に紐かけのつまみ部を持つもの。刃部は直線的な縁部を片面加工する。

**石斧**

14は石斧の破損品。刃部から3分の2程で折れている。全面研磨が行われる。15は破損部から3分の2程の場所に、木柄に括りつけた擦痕がある。16は石斧原材の破片。原礫面を残す。

袴田コレクションには縄文時代早期の石鏃の特徴がある4と、縄文時代中期の特徴のある石槍6が

含まれ、採集された土器ともに当遺跡出土一物と整合性がある。安達コレクションは晩期の土器がほぼ1個体出土している事から墓域もしくは集落域の可能性が高い。両者の共通点は、いずれも縄文時代晩期の土器が含まれている事だろう。晩期後葉の遺物は十勝川を挟んで対岸の屈足市街地側からも出土している。

調査中、袴田・安達両家の御家族に多くの便宜を図って頂いた、ここに明記して感謝の意を表したい。

## (2) カマイロキについて (口絵2、図Ⅱ-9~11、図Ⅵ-4 図版3)

Ⅱ章にて取り上げた松浦武四郎の行路から、説明の足りなかったカマイロキについて考察する。カマイロキとはアイヌ語で、その意味は「神の座する処」又は「熊の冬眠する処」という説がある。

### ・「手控え」の記載

「向の方、カマイロキといへる大平(ポロピラ)。カモイロキ(原文のまま)」。手帳には大平(大崖)を称してカマイロキと記している。

### ・『東西日誌』の記載

『東西日誌』の表現では「本川の幅此処にて凡五十間も有るべし。崖数百仞(じん)赤土混ざり兀崩平にして、川は怒涛吼々として逆まきたり、此向をカマイロキと云り。(中略)カマイロキは此川の東岸、断崖屹々たる壁岩の色灰色たる大岩の半腹に穴有。是に昔より神靈宿るによつて、此処へ行ことは敵はざるが故に、此方より木幣を奉るによつて号とかや、其風景実筆紙の及ぶ処にあわず(原文のまま)」。

現代訳すると「本川の幅おおよそ五十間(約90m)、崖は高さ数十尋(約100m)、赤土混ざり、頂きは平に崩れており、川は渦を巻いて吼々として大波をたて流、岨々たる岩壁の灰白色なる大岩の半腹に洞穴あり、これには昔より神靈宿ると言い伝えあり。よつて此処へは行くことは出来ない。此方よりイナウを奉り礼拝するとかや。この地をカマイロキと伝えり。この風景実筆紙に及ぶ処にあらず」となる。

### ・「十勝日誌」の記載

一般向けに脚色された『十勝日誌』では、カマイロキについて詳細なことが書き込まれている。「岩壁数百仞(じん)轟立たる半に一つの巖洞窟有り、其深測るべからず。恰(あたか)も鬼斧する如く、廉(れん)厲(れい)鬼面に似、山嶽折れ帯かと怪しまる。樹壁岨として牛毛を亂しぬ。是をカマイロキといふ。其の洞窟往古より至りしもの無故、此方より木幣を建て是を拝す。昔し一人の土人巖(てん)より繩を下げ、此の洞窟に入、終に戻らざりしと。依て其の子追々又入、また踏(ひづめ)る事得ざりし由。其後巖敷入る事を戒置る由也(原文のまま)」。

丸山道子は『十勝日誌』を現代訳し、「向う岸は、数百仞(一仞七・八尺)のもの高い崖になって、その半ばあたりに洞穴が見える。崖はあたかも鬼が斧をふるったのかと思われるように、岩は尖って、じっと見ていると鬼面の様に見えるところや、帯を折り畳んだ皺に見えるようなところがある。巨大なこの奇岩の大きな壁に曲がりくねった樹々の絡み合ったしげみもあって、世に珍しい景色のところであった。アイヌの間では昔から「カマイロキ」と呼んでいる。洞穴は「中に入ると絶対に戻っては来れない」と言われていて、この岸からイナウを建てて押んでから通る習慣である。言い伝えによれば「昔一人がこの岩壁の上から繩を下げ、それに伝わって穴に入ったことがあったがとうとう帰って来なかった。その子も同様に試みたが、それも戻らなかった。以来、この洞穴に入って行くことは禁じられている」とのことである(原文のまま)」と解説している。

### ・カマイロキの位置について (図Ⅱ-13)

『東西日誌』にはベケレベを過ぎ、「ヲカトマブカリと云える小川有、是を過ぐる哉 本川端のカム

イロキ向のみ見ゆ。こへてチャシコツと云える少し丘あり。』記述からカムイロキの位置を読み解くと、佐幌川の下部部に合流するベケレベ川を過ぎた辺りからヲカトマブカリという小川を越えた所でカムイロキが見えている。南から北東を見る位置である。また、「チャシコツ、サツテキを過ぎて本川端へ出来たるやカムイロキ。」と記している。この文章ではサツテキの傍にカムイロキが見える位置関係にあることが解る。

口絵2に示した狩勝峠から見た屈足27号ガンケ（大正期の地図ではウエンシリ）と34号現カムイロキ、図版1に示した日勝峠よりみた屈足27号ガンケと現カムイロキの位置関係から想定すると、武四郎の言うカムイロキは屈足25号付近の露頭から34号付近の溶結凝灰岩の露頭まで、全てを含めてカムイロキと総称していたのではないかと思える節がある（図Ⅱ-9）。

『東西日誌』にはカムイロキの図（図Ⅱ-10）が挿絵されているが、武四郎のスケッチをした場所が十勝川を挟んで対岸の位置、もしくは対岸に渡り岸辺、又は崖上の視点から描いたものと推測される。そして、『十勝川日誌』にはバンケベツ川やトンラウシを記した後、「此辺兩岸岨々、崖壁恰も鬼斧を加ふる如し、樹木忽て樞（もみ）、樺等錐を立て地なし。（原文のまま）」と十勝川上流部の地形の厳しさを記し、十勝川上流の絵図（図Ⅱ-11）を挿図しているが、武四郎は聞き取り調査で済ませて上流部を踏査していない。十勝川上流として挿図された絵図には、岩崖の中腹に洞穴のような黒色部分があり、これもカムイロキ周辺の光景である可能性がある。松浦武四郎が十勝に入り最初に屈足に向かったのは、象徴となるカムイロキが見えたからだろう。明治44年の地図では現在の屈足ダム付近をカムイロキ、屈足27号露頭北側をボンナツラケ、南側をウエンシリ（畏怖する場所・険しい処）としている。明治期の段階でカムイロキが詳細に抽出区分けされ、それぞれ地名に名前が残ったものと推測され、その中でもウエンシリと呼ばれる部分がアイヌの人々が怖れる本質的な場所と考えられるのではないだろうか。

## （2）テンネル・晩式土器について

早期初頭の平底土器の初見は、日高地方鶴岡町の採集資料（図Ⅷ-7）の中にあつたが、底部の貝殻痕は、ホタテ圧痕文とは認識されていなかった（藤本1956）。その後、十勝平野の中央部を流れる十勝川の南部、晩台地と呼称されていた地点で、底部にホタテ貝の圧痕文を持つ条痕文平底土器が、ローム層中から石器と一緒に発見され（坂詰・木村1960）、河野広道はこれを「晩式」と呼称し特徴を説明した（河野1961）。

明石博志はその出土範囲を絞り込み、1961年に晩遺跡の第一次調査を実施した（明石1965・1970）。旧石器末の細石刃が、晩式土器と同じローム層中から出土したことから、土器は細石刃の時期まで遡る可能性も考えられていた。つづいて、1967年・1970年に浦幌平和遺跡が調査され、堅穴の床面で出土した晩式に相当する土器を「下傾部下層式」、覆土の上層で出土した土器を「下傾部上層式」と呼び（明石・大場1968、明石1971）、床面で晩式が出土したことから、他の平底土器よりも晩式が古いことが示唆された。

1983年の八千代A遺跡の調査では、細石刃と晩式が層位的に分離されることが判り（佐藤・北沢1985）、晩式土器の年代観は、縄文時代早期初頭に属する土器として評価が定まる。晩遺跡の発見の頃、特徴の類似する資料が釧路地方でもみつかると、その出土地名から「テンネル式」と呼称された（沢1964）。そして、晩式とテンネル式が同じ土器であることが、研究者の中でも早くから認識され（後藤1982）、「テンネル・晩式」土器群として併記することが提唱された（西1997）。そして、帯広市の北沢実の研究（北沢2008）、山原敏朗の研究（山原2014）により十勝の草創期から早期の様相が明らかにされつつある。

道内での晩式の北限は、オホーツク海に面する枝幸町でこれの可能性のある資料の報告がある（西1997）。確実な例としては美幌町のピラオツマッコウマナイチャシ遺跡で、散発的に晩式が出土している。

### （3）交通、交流について

ここに現在の縄文時代早期初頭のテンネル・晩式の出土遺跡を図示する（図Ⅶ-7）。テンネル・晩式の出土遺跡は、沿岸部の立地が主であり、他地方への伝搬については沿岸ルートを想定していた。しかし、今回の調査から十勝地方の北東部にあたる本遺跡まで、十勝の分布範囲が広がったことにより、内陸部に孤立し存在していた富良野地方の東麓郷1遺跡や、中富良野の本幸1遺跡の土器は峠を通じて伝搬したことが有力となり、内陸ルートでの伝搬も考えられるようになった。Ⅱ章にて、地方史として松浦武四郎の峠越えの記録について検討したが、武四郎が目印としたカムイロキを中継点とする峠道が、古来十勝縄文人の交通ルートである可能性が高まったといえよう（口絵2）。

近年では道内だけでなく、海を渡った樺太島にも、底部にホタテ貝圧痕を持つ土器が出土していることが東京大学大学院の大貫静夫・内田和典の研究により報告されている（大貫・福田2014・内田2015）。今後、道北部での発掘事例が増えることで、道内のテンネル・晩式出土の北限が、内陸ルートにより更に北へと拡がる可能性があるといえるだろう。（富永）

## 引用・参考文献

## (報告書)

- 浦幌町教育委員会 1968 「平和遺跡」
- 浦幌町教育委員会 1971 「平和遺跡」
- 恵庭市教育委員会 2004 「恵庭公園遺跡」
- 音更町教育委員会 1984 「駒場遺跡」
- 音更町教育委員会 1986 「相生」
- 音更町教育委員会 1987 「葎原2」
- 音更町教育委員会 2007 「共進2遺跡」
- 帯広市教育委員会 1985 「帯広・晩遺跡」
- 帯広市教育委員会 1986 「帯広・宮本遺跡」
- 帯広市教育委員会 1990 「帯広・八千代A遺跡」
- 上士幌町教育委員会 1985 「居辺遺跡」
- 釧路市埋蔵文化財調査センター 2001 「釧路市大染毛1遺跡調査報告書1」
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1982 「友進遺跡」北埋調報6
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1992 「清水町上清水2遺跡・共栄3遺跡(2)・東松沢2遺跡・芽室町北明1遺跡」北埋調報76
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1993 「芽室町北明1遺跡(1)・音更町西昭和2遺跡・池田町十日川5遺跡」北埋調報82
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2003 「根室市穂香壑穴群(2)」北埋調報184
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2005 「根室市穂香川右岸遺跡」北埋調報212
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2008 「釧路町天塚1遺跡」北埋調報254
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2015 「北斗市押上1遺跡」北埋調報312
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2015 「遠軽町金山6遺跡」北埋調報315
- 鹿追町教育委員会 2002 「鹿追高校遺跡」
- 鹿追町教育委員会 1978 「鹿追高校A遺跡」
- 鹿追町教育委員会 2002 「鹿追高校遺跡」
- 清水町教育委員会 2012 「御影平和遺跡」
- 新得町教育委員会 2000 「屈足11・12遺跡」
- 新得町教育委員会 1989 「北海道上川郡新得町屈足B遺跡発掘調査報告書」
- 中富良野町教育委員会 1968 「中富良野町本幸遺跡発掘調査報告書 辻地点」
- 北海道開拓記念館 1989 「高木1遺跡」北海道開拓記念館研究報告9
- 幕別町教育委員会 1983 「猿別C遺跡の考古学的調査」
- 芽室町教育委員会 1990 「芽室町西土狩4遺跡」
- 芽室町教育委員会 2000 「芽室町小林遺跡」
- 湧別市川遺跡調査チーム 2015 「日本列島北辺域における新石器／縄文化のプロセスに関する考古学的研究」東京大学大学院

## (論文等)

- 明石博志 1965 「晩遺跡—帯広晩台地遺跡調査報告—」『郷土十勝』5
- 秋葉実 1985 「戊午東西蝦夷山川地理取調日誌(上)」北海道出版企画センター
- 秋葉実編纂・編 1997 「松浦武四郎選集」2北海道出版企画センター
- 秋葉実編纂・編 2007 「松浦武四郎選集」5「牛手控(1)1～11」北海道出版企画センター
- 石橋次雄ほか 1991 「十勝考古学とともに」十勝考古学研究所
- 内田和典 2015 「ロシア極東地域の更新世終末から完新世初期の土器研究」『日本列島北辺地



- 城(略) 東京大学
- 大貫静夫・福田正宏編 2014 『環日本海北回廊における完新世初頭の様相解明』 東京大学大学院
- 上富良野町史編纂委員会 1998 『上富良野百年史』 上富良野町
- 川内谷修 2015 『日高管内出土の晩式土器の細分について』 『門別町 ケノマイ2遺跡』 門別町
- 川崎泰彦編 2000 『北海道の名白山』 北海道新聞社道新スポーツ
- 北沢実 2008 『テンネル・晩式土器群 - 貝殻沈線文系平底土器』 『総覧縄文土器』 アムプロモーション
- 工藤研治 2008 『北筒式土器』 『縄文土器総覧』 アムプロモーション
- 黒田敏夫編 1968 『エアリアマップ日本地図帳』 昭文社
- 河野広道 1961 『帯広市晩台地遺跡調査報告』 『アイヌ・モシロ』 5-6 合併号
- 後藤秀彦 1976 『十勝地域の先史時代 - 特に土器型式の推移について -』 『鹿追町考古学研究報告1』 鹿追町
- 後藤秀彦・山原敏朗 2008 『条痕文系平底土器(道東地域)』 『総覧縄文土器』 アムプロモーション
- 佐藤孝則ほか 1985 『十勝二万年史』 十勝川流域史研究会編
- 沢田四朗 1964 『釧路村テンネル第1地点出土の土器について』 『釧路の古代文化』 6
- 澤田恭平 2014 『新得町上佐幌出土の土器について』 『釧路市立博物館館報』 414 釧路市
- 新得町郷土史研究会 2003 『ふるさとの伝承』 新得町
- 依造三・今村朋信編 1980 『北海道の山』 山と溪谷社
- 十勝の自然史研究会 1983 『十勝の自然を歩く』 北海道大学図書刊行会
- 富永勝也 2014 『縄文早期の土器群(道西)』 『環日本海北回廊における完新世初頭の様相解明』 東京大学
- 新美倫子 1997 『シカ死亡時期査定に関する予察』 『動物考古学』 9
- 西幸隆 1997 『北海道東部における縄文早期前半の土器群 - 特にテンネル・晩式土器について -』 『生産の考古学』 同成社
- 畑宏明 1984 『晩式土器に相伴する石器群について』 『河野広道博士没後20年記念論文集』
- 福田正宏 2014 『ロシア極東におけるこれまでの調査成果』 『環日本海北回廊における完新世初頭の様相解明』 東京大学
- 藤本英夫 1956 『底面にホッキ貝殻ある土器』 『先史時代』 3
- 丸山道子 1975 『松浦武四郎著 十勝日誌』 凍土社
- 山原敏朗 2014 『北海道東部の縄文時代早期土器 - 前半の型式群について -』 『環日本海北回廊(略)』 東京大学
- 吉田武三 1977 『松浦武四郎紀行集(下)』 『東西蝦夷山川取調紀行 十勝日誌』 富山房
- 三谷智弘 2010 『入江貝塚における狩猟・漁撈活動の季節性と遺跡の利用形態』 『北海道考古学』 46 北海道考古学会
- 新得町史編さん専門委員会 1972 『新得町七十年史』 新得町
- 新得町百年史編さん専門委員会 2000 『新得町百年史』 新得町
- 森田知忠・遠藤香澄 1984 『Tピット論』 『北海道の研究』 1 清文堂出版
- 西脇対名夫 1991 『共栄3遺跡におけるTピットについて』 『清水町上清水4遺跡・共栄2遺跡・共栄3遺跡』 北理調報70
- 大泰司紀之 1983 『シカ』 『縄文文化の研究』 2 雄山閣
- 大泰司統 1997 『縄文時代のシカ狩猟の権』 『動物考古学』 9
- 大泰司統 2007 『切り合うTピット』 『北海道考古学』 38 北海道考古学会
- 渡辺仁 1973 『The Ainu Ecosystem, American Ethnological Society Monograph No.54』
- 藤原秀樹 2013 『Tピットについて』 『北海道考古学』 49 北海道考古学会
- 澤四郎 1987 『釧路の先史』 釧路市

写真図版



1 遺跡遠景 日勝峠より見た屈足17遺跡と27号ガンケ



2 遺跡遠景 扇ヶ原展望台より見た美臺台地



3 遺跡周辺の景観 南西方向、日高山脈



4 遺跡周辺の景観 西方向、狩勝、パンケ山



5 遺跡周辺の景観 北方向、佐幌、トムラウシ



6 遺跡周辺の景観 北方向、佐幌、トムラウシ



7 遺跡周辺の景観 北東方向、然別



8 遺跡周辺の景観 バンケ山、美臺台地（北から）



9 遺跡周辺の景観 美臺台地（屈足ダム付近）



10 遺跡周辺の景観 美臺台地（屈足17遺跡付近）



11 遺跡周辺の景観 美臺台地（千間坂方向）



12 遺跡周辺の景観 美臺台地（芽室方向）



13 遺跡（ネット付近）近景（鹿追町側からガンケに向け緩やかに傾斜する地形）



14 調査区全景（南から北、奥の電柱付近が現沢頭）



15 調査状況（南から北、谷側に常時水が湧く）

図版 5



16 基本土層 1 (E-F)



17 基本土層 2 (M-N)



18 基本土層 3 (調査区外道路路面 美蔓台地上面土層)



19 調査風景 (北から南)



20 段丘上の屈足17遺跡と屈足27号ガンケ 遺跡下位の土層の露頭（十勝川をはさんで対岸から）



21 ガンケ上位の堆積



22 ガンケ中位の堆積



23 ガンケ下位の堆積（北側）



24 ガンケ下位の堆積（南側）





25 ローム面のシカ足跡（水場に集う様子が解る）



26 湧水ピットとシカ足跡（拡大）



27 湧水ピットとシカ足跡



28 湧水ピット拡大（砂の円状の文様）



29 シカ足跡



30 シカ足跡



31 シカ足跡



32 シカ足跡調査



33 シカ足跡調査



34 シカ足跡調査 (足跡からフレイク出土)



35 シカ足跡調査 (フレイク出土 拡大)



36 土器出土



37 湧水ピット



38 湧水ピット断面



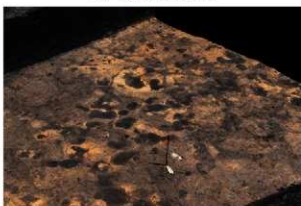
39 湧水ピット断面



40 湧水ピット断面



41 湧水と噴砂 (現世)



42 土器出土状況



43 土器出土状況 (拡大)



44 石器出土状況 (中央にフレイク)



45 調査区南側完掘状況



46 沢頭付近土層断面（火山灰堆積）



47 沢付近自然湧水



48 ローム面の窪みとひび割れ（湧水凹部）



49 十勝川から見た沢頭付近（谷開析）



50 北側調査区最終面、道路側



51 北側調査区最終面、ガンゲ側



52 調査区北側、現沢頭



53 十勝川に注ぐ沢、谷地形

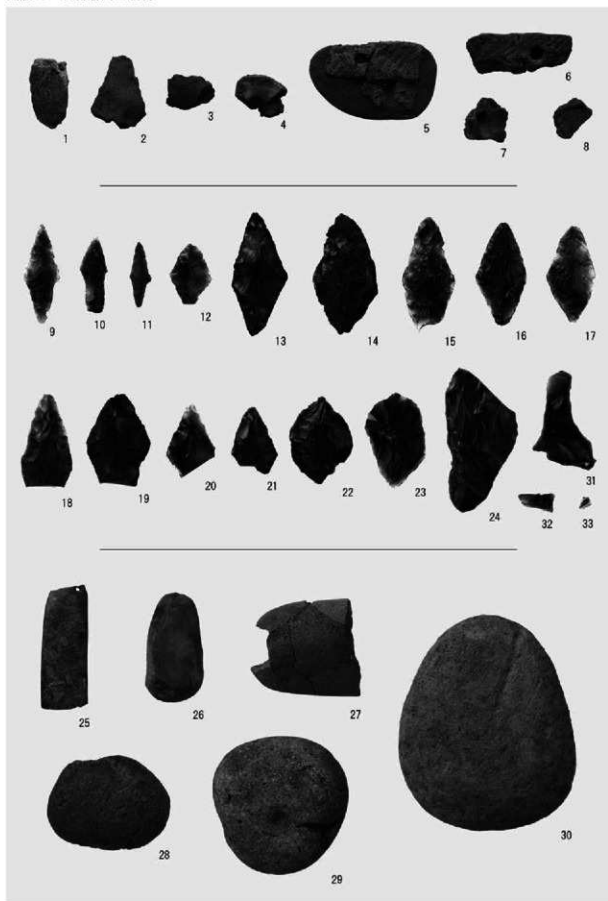


54 北側対岸より見た遺跡、ネット付近



55 20号付近新清橋より見た十勝川上流

图版13 包含层出土遗物



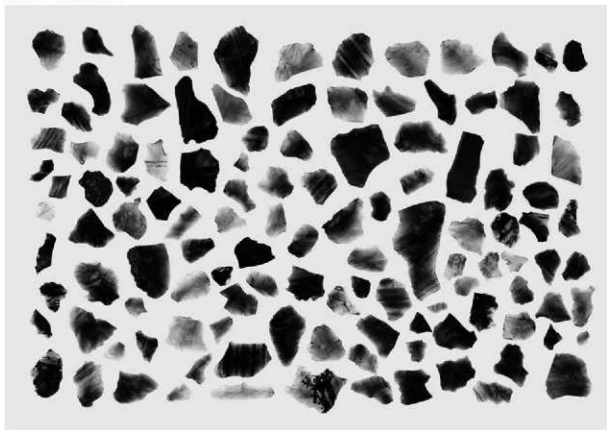
出土遗物

図版14 袴田・安達コレクション

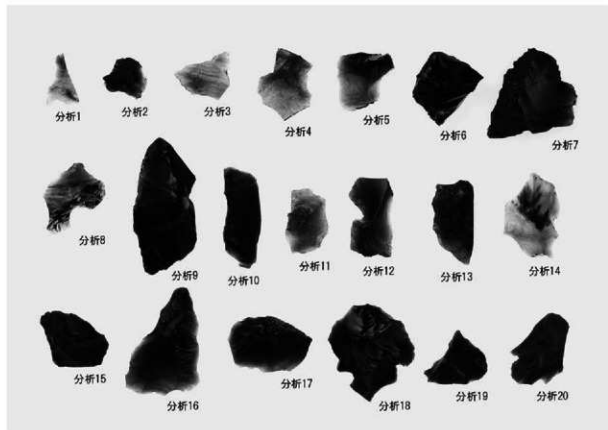




圖版15 分析試料等



寄贈黑曜石剝片



黑曜石產地同定試料  
遺物 (2)

## 報告書抄録

ふりがな	しんとくちょう くつたりじゅうなないせき							
書名	新得町 屈足17遺跡							
副書名	道営農業農村整備事業新屈足地区用地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	(公財) 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 (北埋調報)							
シリーズ番号	第339集							
編著者名	富永勝也・福井淳一							
編集機関	(公財) 北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1 TEL (011) 386-3231							
発行年月日	西暦2017年3月24日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
屈足17遺跡	北海道新得町 屈足784-6ほか	01635	L-06 31	43度 7分 59秒	142度 55分 39秒	20160512 ～ 20160707	900㎡	農道整備特別対策事業新屈足地区工事による用地内埋蔵文化財発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
屈足17遺跡	遺物 包蔵地	縄文時代 早期前葉 ～ 後期初頭 ～ 晩期後葉	沢頭跡 (狩猟場)  石器ブロック1		縄文土器 晩式の土器片や後期前葉・晩期後葉の在地系土器など  石器 出土石器組成が、石槍関連に偏重する  石製品 早期に伴う、擦切り手法の有孔石斧		最下層ローム層から多数の湧水跡があり、沢頭を利用した縄文時代早期初頭からの人と動物の痕跡(シカ足跡)が残る。新得町では最古級に相当する縄文時代早期の晩式土器が出土している。縄文時代中期から後期初頭にかけでは水場を利用する動物の狩猟場で、縄文時代後期初頭では、石槍に関連する石器が偏重して出土し、石槍の加工場、鹿の狩猟場であることが確認された	
寄贈遺物								
袴田邸前出土遺物	散布地	縄文時代 晩期	-		土器・石器		屈足17遺跡の範囲	
安達邸畑出土遺物	散布地	縄文時代 晩期	-		土器・石器		屈足D遺跡の範囲	

(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第339集

## 新得町 屈足17遺跡

—道営農業農村整備事業新屈足地区用地内埋蔵文化財調査報告書—

発行 平成29(2017)年3月24日  
編集 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター  
〒069-0832 江別市西野幌685番地1  
TEL (011) 386-3231 FAX (011) 386-3238  
印刷 柏楊印刷株式会社  
〒007-0802 札幌市東区東苗穂2条3丁目4番48号  
TEL (011) 789-2377 FAX (011) 789-2376